鍛冶兄弟のダンジョン賛歌

ケツアゴ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ヴェルフに別方面の鍛冶の才能を持つ兄が居たら、そんな話です。春姫など一部キャラに変更点あります。活動報告でネタ募集あり

目次

プロローグ　1
第一話　9
第二話　16
第三話　24
第四話　34
第五話　41
第六話　49
第七話　58
第八話　67
第九話　75
第十話　85
第十一話　92
第十二話　100
第十三話　108
閑話　弟のちょっと微妙な一日　117
第十四話　124
第十五話　133
第十六話　139
第十七話　147
第十八話　155
第十九話　162
第二十話　169
第二十一話　176
お気に入り千突破記念　春姫との結婚生活　183

プロローグ

汗が吹き出る熱気がこもった工房の中、只愚直に鎚を振るい続ける。耳に届くのは金属がぶつかり合う音だけで、目に入るのは少しずつ形を変えて完成に近付く金属。それ以外は一切が意識外であり、恐らく今の俺を殺害するのは容易だろうが、その様な価値が皆無な思考は当然浮かばない。

「……」

当初の予定通り想定した物が出来上がる。当然、何の感慨も浮かばない。技が確かならば何ら変化が起きる要素はなく、己の技量では成し得ない筈の逸品を作り出した時のみ心が動く。但し、それは此処までの話、鍛冶職人としてだけの話であり、背中の一部が熱くなったのを感じ作品に手を翳す。今の俺は鍛冶職人であり神へファイストスの眷属として作り上げた籠手に向き合っていた。

「我が見抜くは森羅万象　この世全てを解析し、全ての神秘を暴き立てる　我に見抜けぬ秘密無し　アナライズ」

光の粒子が籠手を包み込み、金属構成、強度、重量のバランス、物体を構成する要素全てが頭に入ってくる。最後に付与された力を理解した時、僅かに口元が緩むのを感じ

ていた。

「『力＋２００』か。……良し。お前の名はゴリラアームＤＸだ」

神の恩恵を得た者には時にスキルという能力が発現する。俺が得たスキルは『祝福付与（アビリティエンチャント）』。作り出した物に何かしらの特殊能力が付与される。試した結果、より上質な素材でより優れた技術で加工すれば上質の効果が得られる。作り出す物で一定の傾向があるが現在調査中だ。此度はダンジョン深層で採取された上質なアダマンタイトに強竜（カドモス）の甲殻を組み合わせてみたのだが満足行く一品が完成した。

「早速依頼主の所に行くとするか。さて、バベルとホームのどちらに居るのか。無駄足は勘弁だが、奴の反応が楽しみだ」

愚弟よ、詰まらぬ事に拘って己の幅を狭めたいなら好きにしろ。俺は己の全てを使い更なる高見に向かって歩き続けるぞ。俺は籠手を布で梱包すると工房を後にする。外に出ると轟々と降り続く土砂降りだった。

「……運気を上げる装備が欲しいな」

どうやら集中しすぎて雨音に気付かなかったらしい。工房に傘は置いていないしどうすべきかと悩んだ時、向こうから覚束無い足取りで傘を片手に向かってくる者が居た……。

「おい、彼奴って『奇跡の鍛工（カオスメーカー）』じゃないか？」
「あの没落した鍛冶貴族クロッゾのっ!?」
鍛冶貴族、それが俺の一族が賜っていた名であり、古代に祖先が精霊を助けて得た力で途轍もない威力の魔剣を作り出せたから得たものだ。森を焼き払い精霊の怒りを買って失った地位にも名誉にも何一つ価値はない。事実、住処を焼いたとしてエルフには未だ睨まれるし、俺のスキルが発現した途端に欲に囚われた父達を見れば厄介事にしかならん。だから最初に恩恵を得て半年経った当日に当時の主神を脅して改宗を可能にしてオラリオにやって来た。
愚弟……ヴェルフの奴は暫く祖国ラキアに居た様だが主神に許されオラリオに来たまでは良かったが、クロッゾの魔剣を打てるのに気に入らぬと打とうとしない。実に愚かな事だ。

「さて、此処に居れば良いのだが……」
　俺はバベルの内部に入り真上を向く。派閥の問題から共に行けぬので、傘を借りた同行者を待たせてエレベーターに乗って上階を目指す。ホームに居るのなら店で傘を借りねば。此処五ヶ月ほど主神殿に顔を見せていないしな。

「……凄まじいな。装備として十分な出来だが得られる効果がデタラメだ」
「そうか。オラリオ最強の男に誉められるのはむず痒いな」
　猛者（おうじゃ）オッタル、それが今回の依頼主の名だ。大手のファミリアが遠征時に持ち帰れば極僅かに回ってくる、そんな貴重な素材を単独で集めて料金代わりに渡してくれる上客。ゴリラアームＤＸをお気に召したらしく珍しく表情が変化している。
「……所で名前だがどうにかならないか？」
「妙な事を言うな。ゴリラアームＤＸが気に入らないのなら……スーパーゴリラハンドＥＸでも構わないが……」
「いや、俺が言っているのは……」

俺の付けた名の何が不服なのか困った表情を浮かべるオッタル。やれやれ、注文の多い上客だと困った時、横から声が掛けられた。途端にオッタルの顔が何時もと同じ物になる。此奴が忠誠を捧げる唯一の相手、美神フレイヤだ。

「構わないじゃないの、最初の名前で。ねぇ、オッタル」

「……はっ。では、料金として深層の素材を送っておく。もう去れ」

元より長居する気がなかった俺は神フレイヤの私室を去る。俺の作品に興味があるとかオッタルに用事がある場合に立ち入ることを許可されているが、他の眷属は面白くないのが顔に出ていて面倒臭い。連れを待たせていることだし、主神殿には次の機会に会うとしよう。此処まで久しいのだからどうせ小言を言われるのは同じだ。

「待たせたな、春姫」

「いいえ、大丈夫で御座います、ヴァルツ様」

バベル一階に戻れば座っていれば良い物を立って待っていた少女が嬉しそうに寄って来る。狐の獣人で極東出身の春姫だ。珍しい種族と美貌から荒くれが少なくない冒

険者に声を掛けられれば厄介だが、所属ファミリアが有力故に喧嘩を売る馬鹿も居ま
い。
「今日は助かった。用事がなければ茶でもご馳走しよう。好きな甘味も選んで良いぞ」
「で、では、お団子を……」
　遠慮がちだが尻尾や耳が動いて喜びを伝えてくる。今回、仕事に夢中になって食事を
忘れがちな俺に差し入れを用意して向かったのだが見事に差し入れを忘れた上に俺が
前忘れた傘を届けるのは良いが自分の分も忘れたのでバベルまで同じ傘でやって来た。
さて、この少女と出会ったのはどんな切っ掛けだっただろうか……。

『俺の作品を取り返しに来たが、まさか人身売買までやっているとはな』

　ああ、思い出した。俺の作品が盗まれたから暇潰しにオラリオの外にあった盗賊のア
ジトに乗り込んだら捕まっていたのだったな。勘当された身で寄る辺もなく、仕方ない
のでオラリオまで連れて行って知人に紹介したら恩返しのつもりか足繁く通って来る

ようになった。まあ、別に迷惑でもないし助かっているから構わんがな。

「……春姫は毎日が楽しいです。大変な事や……ちょっと怖い人もいますけど、きっと盗賊の方々に売られていたら今頃……」

「おい、考え事は良いがはみ出しているぞ」

雨足は既に弱まっているがボケッとして傘からはみ出した春姫の肩を抱き寄せて傘の中に入れる。少し歩けば春姫が所属するファミリア、ロキ・ファミリアのホームである黄昏の館が見えてきた。

「ああ、そう言えば遠征が近いのだったな。無事に帰って来たら普段の礼に……」

「春姫たーん！」

何かご馳走しようと言う寸前、扉が開いて無乳の女神が飛び出して来る。春姫に抱き付きセクハラしそうだったので抱き寄せれば顔面から地面に激突した。

「何をやっているんだ、ロキ……」

「おや、久しいな『九魔姫（ナインヘル）』」

呆れ顔で出て来たハイエルフに軽く挨拶を行っておく。初めて会った時は迷惑をかけたからな。

アレはダンジョン内で出会った時、連れのエルフ共が俺の家名を聞いて恨み言をぶつけて来たから頼んだんだ。

『よし。王族のお前が代表して殴れ。会う度にこれでは鬱陶しい』

『いや、初対面で何を言うんだ、貴様は……』

第一話

春姫にとってヴァルツは正しく英雄であった。客人の大切な神への供物を寝ぼけて食べたとして勘当され、モンスターに襲われた挙げ句に盗賊に捕まって商品として売られる……その前に助けられた。

「流石に檻から出したから、はい、さよなら、とはいかんな」

他にも商品は大勢居り、帰る場所の有る者はギルドに任せ、問題の帰る場所が無い者は伝手を頼って世話をした。春姫もその中の一人。珍しい種族との事で変な相手に目を付けられても大丈夫なようにとロキ・ファミリアに紹介されたのだ。

『うーん、別にええけど……魔具欲しいなー』

魔具、それがヴァルツの作り出す特殊な力を持つ装備の呼び名だ。後から知ったがロキは美形好きなので春姫を眷属にするのは割と乗り気だったが、言うだけならタダとばかりに強請ってきた。

『別に構わんが、計算力を高めるインテルヘッドと敏捷が３０上昇するとんずらブーツと口笛が上手になる盾ピューピュー君、好きなのを選べ。……むっ、不服か？　ならば全部渡そう』

『あー、うん。普通に装備として優秀なのは知っとるさかい一個で良かったんやけど、全部くれるちゅうなら貰っとくわ。良し、契約成立や！』

この時、微妙な顔をロキ達がしてたのは名前のせいだと気付かなかった春姫。変な名前だと思ったがオラリオでは普通だと思っており、暫く後に口にしたら全力で否定された。

『……良かった。虎の子として成長速度上昇の腕輪を用意してたんだが渡さずに済んだか。……一度決めた契約を反故にはすまい？』

この後、最初の請求がなければ渡す予定だったなど言われたロキが歯噛みしたり、春姫に発現した魔法が規格外で幹部内で今後の扱いに困ったりと色々有ったが、お礼の気持ちから何かと差し入れをしたり、その度に気を使って貰ったりと徐々に女として惹かれて行くのを自覚するのに時間は掛からなかった。

ロキには通い妻などとからかわれ、ある時、勇気を出して仕事後の彼の汗を拭くのを手伝うと言ったのが引き金となり、想いを伝えたことで二人は結ばれた。だが、その後も態度が変わらず、色恋に疎い春姫が頼れる幹部で恋する乙女として先輩であるティオネに相談した結果、もう一度迫ってみたら？　と言われて行ってみたのだが

『あ、あの、背中をお拭きした時の続きを……』

『殿方の鎖骨ー！　と叫んで拭く前に気絶した時の事か？』

ヴァルツが嘘で逃げる不義理な相手だとは思えず、勇気を出した結果が赤っ恥。何の話だと訊ねられて逃げ帰り、話を耳にしたロキに純情むっつりスケベとからかわれたのは言うまでもない

まあ、そんなこんなで今の関係は続いている。もう今のままでも良いんじゃないかな、偶にそう思いながらサポーターとして一歩一歩精進を続ける春姫であった。

「……アンタねぇ。恩恵が消えたら分かるから生きてるのは知ってるけど、こうやって滅多に顔を出さないのは止めなさいよね」

「悪いとは思っているが、毎日のように新たな武具防具の案が浮かび、ダンジョンと工房と家を往復する日々だ。今日も手持ちの金が残り少なくなったから売れた商品の取り分を貰いに来たついでに主神殿に顔を見せねばと思い立ったという訳でな」

「……あと、魔具の名前は相変わらずね。性能は普通に第二級や第一級クラスで更に能力が付与されてるってのに」

お洒落過ぎて装備するのが恥ずかしいと、そういう訳か。どうも弟以外は俺の作品の

名を手放しで誉めん。やれやれ、素直になれば良い物を。俺はステイタスを更新されながら少しは反省する。もう少し忙しくない時間帯に訪ねるべきであったと、机の上の書類で悟った。

「……所で愚弟は相も変わらずか？」

「ええ、何を言われても魔剣を打とうとしないし、欲しがる相手には攻撃的よ」

「……より良い道具を求め文明は発展してきた。使い捨てだから、それに頼ってしまうのは駄目だから、その様な理由で存在を否定するのならば一切の文明を捨てて野山で暮らせばいい。中途半端なのだよ、彼奴は。哀れだから後で金でも恵んでやろう」

「はいはい、ツンデレツンデレ。終わったわよ」

ヴァルツ・クロッゾ

Ｌｖ．３

力　ｉ：０→Ｂ：７５５

耐久　ｉ：０→Ｃ：６２９

器用　ｉ：０→Ｓ：９１１

敏捷　ｉ：０→Ｃ：６０２

魔力　ｉ：０→Ｅ：４９１

鍛冶　H
神秘　i

《魔法》
【アナライズ】
・解析魔法
・詠唱式【我が見抜くは森羅万象　この世全てを解析し、全ての神秘を暴き立てる我に見抜けぬ秘密無し】
《スキル》
祝福付与（アビリティエンチャント）
・制作物に能力付与
・内容は素材及び制作物によって変化
創造支配（クリエイトマスタリー）
・制作物を使いこなせる

「……半年でこれってそれの影響よね」

主神殿の視線が向けられているのは俺の腕に填められた腕輪。バロールの魔石とオリハルコンヴィーヴルの涙その他諸々、素材の末端価格だけで数億ヴァリス、これを市場に出せば十倍でも確実に売れる、そういった物だ。
「そう言えばアンタ、この前ロキに聞いたんだけど盗賊から助けた春姫って子に世話焼かれてんだって？　正直、どう思ってるの？」
「……美人で心優しい女性だ。心惹かれていないと言えば嘘になるな。今の関係が心地良いから当分想いを伝える気は無いが」
本来、別のファミリアの団員同士の結婚は面倒事の元だ。それらをどうにかする方法を考えなければ安易に伝えるべきではない。幾らファミリア間の繋がりが強いと言っても。
（ロキも言ってたけど面倒臭い恋愛してるわね、この子達）

「いらっしゃい！　じゃが丸君揚げたてだよ！」
「むっ。自堕落を司る神かと思っていたがちゃんと働いているな、神ヘスティア」
「僕は竈の女神だよっ！」
懐も温かくなったので次は腹を満たそうと屋台に立ち寄れば、其処には最近までヘ

ファイストス・ファミリアのホームに居候して自堕落な生活をしていた女神が屋台の店員をやっていた。働けたのだな、此奴。……なお、俺は椿から話を聞いた時、強制的に送還して本来の仕事に戻すべきだと進言した。

「君、何か失礼なことを考えていないかいっ!?　もう少し神への敬意を持ちなよ!」

「今更だな。前の主神を魔剣で脅して改宗可能にさせたからな。取りあえずチーズと明太子を一個ずつ貰おう」

「……じゃあ、私は小豆クリーム味を一個」

背後から声が聞こえたので振り返ればロキ・ファミリアの剣姫(けんき)アイズ・ヴァレンシュタインが居た。

「……お久しぶりです。突然ですけど遠征中だけそれを貸して下さい」

剣姫が言うそれとは主神殿が先程言った腕輪、神ロキに伝えた時に偶々聞いてから何度もこうやって貸して欲しいと言ってくる成長加速効果が付与された腕輪だ。

「何度も言うがエクセリアギガマックスターボΩは貸さん」

(……効果は凄いのに相変わらず凄く変な名前)

第二話

早朝、バベル前の広場にロキ・ファミリアの選抜隊の姿があった。時間帯が時間帯だが欠伸をかみ殺している者など居らず、皆、今から向かう先の危険性を承知して緊張した面持ち。今回彼らが目指すのは未到達領域。ファミリアの名を上げる為、ダンジョン攻略の第一歩とすべく気合いが入っている。

（え、遠征は二回目ですが緊張します……）

春姫もサポーターとして参加しており、前回の遠征では五体無事に帰還するも昨日まで言葉を交わしていた仲間の死を体験した。手が僅かに震える中、ふと目を向けたバベルの入り口から丁度出てきた者を見て耳が反応する。当然、ヴァルツである。

幅広の大剣とパンパンに詰まったバックパックを背負い、ロキ・ファミリアに気付いたのか先頭に居た団長のフィンに近寄って来た。春姫も日頃なら歩み寄っていく所だが、流石に自重する。厳しくて怖い先輩が居るのだ。只、尻尾だけが内心を表す様にソワソワと動いていた。

『勇者（ブレイバー）』、今から遠征か？　……丁度良い。ダンジョン帰りに其方に寄って渡す予定の

物があった」

「へえ。君がわざわざ用意してくれるって期待できるね、奇跡の鍛工（カオスメーカー）」

バックパックの外ポケットから取り出して手渡されたのは小さな箱で中には飾り気のない五個の指輪、石は恐らく魔石を加工したものだろうが填められている。フィンはそれを興味深そうに眺め、他の団員も同様の視線を送る。前の主神を脅してオラリオにやって来た等風変わりな噂が絶えない彼だが、作り出す装備は基本的な価値でさえ熟練の職人に匹敵し、付加される能力によって更に価値が跳ね上がる。

何よりオラリオ最強の冒険者であるオッタルが上客である事が過大評価で無いことを証明していた。

「前回譲って貰ったウダイオスの魔石とスパルトイのドロップアイテムで作った。詠唱時間を半減してくれるが使い捨てだ、よく考えて使え。名は……アカマキギャミアオマミマミキミャキマキだ」

魔法の使用においてもっとも弱点となるのが詠唱時間である。強力な程に一節毎に掛かる時間も増え、数秒の差が生死を分ける事もある。リヴェリアやレフィーヤという優秀な魔導師が所属するロキ・ファミリアだからこそ価値がどれ程か理解出来た。

そして、誰も真偽を疑わない。彼への好き嫌いはあっても作り出す物への信頼だけは共通事項なのだ。

「……相変わらず凄いな。うん。有り難く使わせて貰うよ」
「ディアンケヒト・ファミリアで聞いたがカドモスの泉水を依頼されているのだろう？役に立ったら魔石かドロップアイテムを優先的に売ってくれれば助かる」
フィンが言う相変わらず凄いとは何を差しているのか、話を聞いていた者全員が悩むネーミングと効果であった。取り敢えず残念な名前であるのは確かである。用事は終わったとばかりに立ち去るヴァルツだが、春姫に軽く手を振って擦れ違いざまに口を開く。
「お前の力で仲間を守れ。そうすれば仲間がお前を守ってくれる。無事に帰って来たら何か祝いの品を贈ろう」
「が、頑張ります！」
少し気合いが空回りしそうな春姫だが上層部の内に頼れる仲間が何とかする事だろう。完全に恋する乙女の目で彼の背中を見詰める春姫を見ながらアマゾネスの姉妹は呟いた。
「あれで付き合っていないんだから凄いよね」
「春姫もさっさと押し倒せば良いのに。裸見たら気絶するなら目隠しするなりして……エロいわね、凄く」

目を布で覆い服をはだけた春姫が布団に相手を誘う光景を思い浮かべたティオネは背徳的な物を感じてしまう。妙な色気がそこにあった。

「……という訳で春姫への贈り物を今から考えたいのだが知恵を貸して欲しい」
「いや、朝飯買いに行く途中で連れてこられたと思ったらそんな相談かよ、兄貴っ!?」
「まあ、酒を奢って貰えるなら相談に乗るぞ」
俺の知人で意中の相手への贈り物を相談できる相手は少ない。上客として猛者を筆頭にフレイヤ・ファミリアの連中とは懇意にしているし、既存の作品を自分にもと言う注文も受けている。ただしアレン、貴様は駄目だ。遊びだのなんだと言ったのだから、嫌いな相手と遊ばなくとも問題有るまい？
閑話休題、神フレイヤを信奉する奴らに他の女について相談しても役に立つとは思えず、そこそこ交流のあるアスフィは主神のお供で不在。他の団員とは其処まで交流がない上に主神である神ヘルメスは胡散臭い。
あと、椿。お前は別に呼んでいない。勝手について来ただけだ。だが、一応出身地は同じか。ならば一応役に立つかも知れんな。
「それとヴェル吉。この男、作品が全然売れずに困窮している弟を心配して飯を奢ろう

と言うのだ。この期に栄養を補充しておけ」

……相変わらず口の減らない団長だ。それは兎も角、何故愚弟であるヴェルフの作品が売れないのか、最近主神殿との会話で判明した。お前の作った物は性能はそこそこだが名前が良くない。何故なら……。

「俺達が付ける名前はセンスが光り過ぎて気後れしてしまうようだ」

「な、なんだとっ!?　自信があったのに売れなくて不満だったが、そんな理由だったのかっ!?」

驚愕するヴェルフだが仕方がない。俺も今まで性能が褒められても付けた銘に微妙な顔をされる理由が分からなかったが、気後れして居たのなら仕方が無いだろう。……メイン装備である『大金剛変化自在丸秋雨雲水δⅢ』の名を略した大金剛でしか呼ばれない理由に納得がいった。

これは俺が今まで作った中でも特にお気に入りであり、わざわざ秘境を巡って漸く手に入れた黒竜の鱗を高ランク冒険者に傷付けて貰い、破片を加工して作った道具で加工して、貴重な材料で作った魔剣を駆使して何とか完成に至った。不破壊属性もオリハルコンを使用して付与しており、多くても二個の所が自己再生等の他にも様々な能力が発現しているのだ。

「おい、店主。強めの酒をくれ。素面で聞いているのは馬鹿馬鹿しい」
　既に何杯ものジョッキを空にした椿は俺の奢りだからと好き放題に注文する。……役に立たなかったら半分しか払わんぞ。

「つーか、前に魔導書をやったんだろ？　普通に飯奢るとかで良いんじゃねえか？」
　ローストビーフのサンドイッチをアイスティーで流し込みながら言ってくるヴェルフ。確かに通常数千万ヴァリスで売買される貴重品だが、ちょっとした訳が有るのだ。
　春姫同様に盗賊から助けて故郷に帰った者の中に魔法大国の出身が居て、更に親類に魔導書を作れるほどの者が居たらしく謝礼として贈られたが、解析の結果として魔法スロットを増やせる物ではなく既に埋まっている俺には無用の長物。ならば金に換えるよりも同じ境遇だった春姫の役に立つ方が……、という訳だ。
「……櫛などどうだ？」

　つまり元手がタダの物なのだから普段の感謝も兼ねてそれなりの物を贈りたいと

言った時、山盛りの肉料理に食らいついていた椿が呟いた。
「手前も会った事があるが素晴らしい髪だった。ならば櫛も一級の物を使ったら良かろう。手前の手元に木竜（グリーンドラゴン）のドロップアイテムが有る。手製の品も良いが、偶には本職に任せた物も良かろう？　腕の良い職人を紹介してやろう。対価はロキ・ファミリアに予約を入れた深層の素材を幾つかで構わんさ」

「……驚いた。まさか参考になる意見がお前から出るとはな、椿。完全に酔ったからか？」
「そう言えば一応女だったな」
「よし。手前に喧嘩売っているな、お前達」

早速とばかりに先に職人の所に向かった俺だが、財布を見事にせしめて好き放題に食べていた椿とヴェルフが俺の知らぬ間にこんな話をしていた。
「んで、何で櫛を勧めたんだよ？　他に理由が有るだろ」
「……知っているか？　手前や春姫の故郷では櫛を贈るのは求婚を意味するのだ。ふはははは！　お前に義理の姉が出来るかも知れんぞ？」

そして幾日か経った後、厄介な新種に遭遇したロキ・ファミリア達はやむを得ず引き返し、オラリオに帰還の知らせが広まる少し前の時間、俺は血塗れで何か良いことでもあったかの様な顔をしながら街を疾走する新人冒険者を目撃するのだが、『怒蛇（ヨルムガルド）』から解析を頼まれた極彩色の魔石によって忘れてしまった……。

第三話

　工房に響きわたる金属音が止み、完成した作品を所定の場所に並べる。未だ魔具としては商品にならず、今から順繰りに解析をして付与された能力を確かめる。……未だ目指すべき高みには届かず。多くの鍛冶師が目指しもしない頂は未だ片鱗すら見えずにいた。だが、今は一歩一歩進むだけだ。

「突き刺した相手を内部から焼くトライデント……こんがり丸焼きフォーク。殴った相手を癒やす籠手……痛いの痛いの飛んでい拳。ふむ。後は魔剣が数本、これらは残存魔力を色で知らせる効果を付けられているな」

　どうやら長時間作業に没頭していたらしくネーミングを終えると空腹と乾きを感じる。遠征中でなければ合い鍵を渡している春姫が差し入れを置いていたり持って待っていたりするのだが暫くは帰って来ないだろう。適当に買っておいた保存食を水で流し込んでドアを開けば足元に一匹の野良猫が座って此方を眺めていた。

　ボスと呼んでいる雄で近所の猫のボス猫をしており、しつこいと感じない周期で餌を強請りにやって来る。豊穣の女主人という店の賄いがクリームシチューの時は毎回姿を見せる他、金物屋の斑猫や黒い野良猫と仲が良いらしい。尚、他の場所では違う名前

で呼ばれており、名を聞かれても、俺の名前はいっぱいあってな、とでも困ったように名乗るのだろう。

「……どうちまちたかー！　餌が欲しいんでちゅねー。ほーら、煮干しでちゅよー！　うーん。ボスは本当に可愛いでちゅねー」

人に慣れているのか撫でたり抱っこしても抵抗せず喉をゴロゴロと鳴らす。常備している上物の煮干しを俺の手から直接食べ、粉を舐めとるとお礼を言うようにニャアと鳴いて去って行くボスを目で追うと此方を見て固まっている怒蛇達の姿があった。

「……えっと、出直した方が良いですか？」

「いや、空気を入れ換える為に開けただけで出掛ける用事は無い。……それよりも早いが何かあったのか？」

昨日は食料を買いに出た以外は工房に籠もりっきりだが、どうやら遠征後恒例のドロップアイテムの換金作業の途中の様子。誰か死んだという顔でもなく何かしら不足の事態があったから帰還したのだろう。手にはカドモスの皮膜、それも上質だ。

……剣姫め。何故出直すか聞いたかは知らぬが、予約したとは言え口約束。他のドロップアイテムを売るからと皮膜を他のファミリアに買われては困る。昨夜、アイデアが浮かんだのだ。

「千五百万でどうだ？」
「千五ひゃ……!?」
「よし、売った！」
『千の妖精（サウンド・エルフ）』が驚いているが、ディアンケヒト・ファミリアなら無茶な依頼をしたから痛み分けと千二百万は出せる筈。怒蛇は即決しホクホク顔で皮膜を渡してきたが、その際に奇妙な魔石を手渡してきた。妙な色で……興味深い。これが何なのか、何が作れるのか、それを俺は知りたい。

丁度昨日の買い出し前にフレイヤ・ファミリアの四つ子からの新規の武器の作成依頼を終え、今回は素材ではなく現金での依頼として一億二千万有ったので二千万の袋を渡す。五百万は奇妙な魔石の代金、つまり解析後は寄越せという事だ。
「まいどあり――！　あっ、後で他の素材も売りに来るから。春姫に来させた方が良い？」
「いや、どうせならばゆっくりと話がしたいからな。約束の物も有ることだし、明日にでも一緒に昼飯を食べようとでも伝えておいてくれ」

さて、解析後は半分は粉々に砕いて溶かした他の金属に混ぜ込んでみるか。いや、次に何時手に入るか分からないのだから……。

実にそそるな！

「あーあ。仕事モード入っちゃったよ。じゃあ、帰ろっか。お腹ペコペコだよー」

「そ、そうですね。二千万とか持っているの不安ですし、ディアンケヒト・ファミリアにも寄らなくちゃいけませんし」

顎に手を当てて考え事を始めた俺に背を向けて四人は去っていく。この後、気がつけば空が暗くなり始めていた。腹も減ったので何処かに食べに行くかと思ったが、先ずは解析だけでもと思い魔法を掛ける。対象である魔石の持ち主であるモンスターの情報が説明書を読んだかのように頭に入り込んできた。

「……情報が少ないな」

言ってみれば組織の一部門についてだけ知って、組織全体の活動内容や本部の場所、組織名事態は不明という感じ。まあ、俺はあくまで鍛冶師。ダンジョンについてはロキ・ファミリアに話して後は任せるとしよう。

「……宴の席での余興か？」
　神ロキのお気に入りの店で宴会の場といえば此処だと思い豊穣の女主人に来てみれば縛り上げられている『凶狼（ヴァナルガンド）』ベート・ローガの姿が目に入る。
「んな訳有るかいっ！　この阿呆がアイズにセクハラかましおったから罰や」
　どうも宴も開始からかなり経過しているらしく、中には酔いつぶれている者も居る。神ロキは縛られて吊されている凶狼を小突いていた。見れば剣姫は確かに落ち込んだ様子だが、いったい何を言われたのやら。
　因みに奴のことだが嫌っていない。口は悪いが幼い頃に語り父や祖父さえもが正気を疑った夢を否定しなかったからな。
「例の件は明日報告する。では、宴を楽しんでくれ」
　春姫と言葉を交わしたいが宴の邪魔をするのも無粋と言うもの。入ったからには席に着こうと空いているカウンター席に向かったのだが、何故か隣にほろ酔い加減の春姫が座ってきた。
「ふふふふ。ヴァルツ様が沢山居ます」

「だいぶ酔っているな……」

言ったら悪いが酒臭い。戻らなくて良いのかとロキ・ファミリアのテーブルに目を向ければ先程まで春姫が座っていた席の周囲は皆酔いつぶれ、彼女の席の前には大量のジョッキが重なっていた。流石に恋人でもない女性を飲みに誘うのは下心があるようで知らなかったが酒豪だったか。

「おーい、ヴァルツー。高い金払って貰ったさかい、春姫たんは貸し出すでー。でも、お持ち帰りはNGやさかいにな」

「誰が連れて帰るか、全く……」

セクハラなら自分の眷属に限って欲しいと思っていると春姫が俺が注文した酒に瓶を持ってコップに酒を注いでいる。どうも酌をしてくれるらしい。……悪くない気分だ。

「えへへへー！　このお酒も美味しいです」

お前が飲むのかっ!?　しかも俺のコップだぞ、それは。仕方ない、新しいコップを頼むとするか。間接キスは流石にな……。

「あっ、これってヴァルツ様ので御座いますね。はい、お返しいたします」

半分ほど飲んだコップを差し出される。受け取ろうとしたのだが両手で包み込む様に持っていて受け取りにくいのだが、そう思っていると何かを察したという顔。助かったと思ったらコップを持って俺の口に当てて傾けて来た……先程口を付けていた場所なのは気のせいだな。

「春姫との間接キスですよ～」

駄目だ、この酔っ払いどうにかしないと！

「……すぅ」

「助かった……」

酔いが回ったのか春姫は寝息をたてて俺により掛かっている。無防備に体を預け気持ちよさそうに笑みを浮かべてた。椿が言っていたが遠征帰りにも関わらず艶のある上質な髪から良い香りがした。

「……ついでにホームに寄って報告しろと言われたが」

宴も終わり酔い潰れていない者が酔い潰れた者を連れて帰る中、何故か俺の背中には春姫が乗っていた。どうしても背中で感じる感触に意識が向く。……所詮俺も男だったか。

「どーやー、ヴァルツー！　春姫のおっぱいは柔らかいか、へぶぅ!?」

「この馬鹿は無視して構わん。悪いな、色々と」

流石慣れた手際で神ロキを沈める九魔姫。別に構わんと首を振り、ロキ・ファミリアのホームである黄昏の館に到着すると先に他の面々を担いでいた怒蛇に春姫を託し、神ロキの部屋へと通される。既にＬｖ．６の三人も揃っていた。

「んじゃ、簡潔でええから教えてくれや。妙な新種のモンスターやけど、何が分かった？」

……流石超位的存在、先程までのたちの悪いセクハラ上司の顔は何処かに行っている。俺が普通の存在ではないと顔に出していたか？

「俺が分かったのは一部だけ、働き蜂の様な存在だというだけだ。魔石を集め、何かに献

上するという習性を持っている、それ以外は分からん」

　つまり他のモンスターの魔石を食べることを覚えて強くなった強化種と呼ばれる存在が今もダンジョンで力を高めているという事だ。当然空気が重くなるが、それを振り払う様に神ロキが手を叩いた。

「はいはい、酒の入った頭で詳しく分からん物を心配してもしゃーない！　解散解散！」

　俺はこの後で直ぐに帰り、神ロキは三人と部屋に残る。どうもパターンとして春姫は二日酔いでランチに行けないだろうと伝えられたので、ならば暫く研究に没頭したいと櫛を代わりに渡すように言ったが断られたのだが、その事について神ロキから話があるようだ。

「……あの様子やと春姫の故郷では求婚を意味するって知らんみたいやな。よし！　面白そうやから手渡す時は覗くで！」

　止めて置けと、三人から怒られ説教を受ける神ロキであった。

「……全く。ヴァルツが春姫に櫛を渡すのを覗こうとか言うなんて」
（えぇっ!?）
勇者が部屋に戻る帰り、呟いたのをトイレに起きていた春姫が偶然耳にしてしまっていた……。

第四話

「ええっ!?　く、櫛を贈るって事は求こ……」

「しー!　命ちゃん、しー!」

昨夜全く寝付けなかった春姫はミスを連発して朝の炊事担もで先輩にメッタメタに叱られた後、街中で出会した幼なじみの命に相談を持ちかけた。元々春姫が住んでいた屋敷の近くに孤児院のような場所があり、色々あって仲良くなった後で出稼ぎのために他の仲間とタケミカヅチ・ファミリアとしてオラリオに来たのだが、件の一件でロキ・ファミリアに入団後直ぐに再会したのだ。

言葉遣いも素が出ている春姫が偶然立ち聞きした話を相談すると命は顔を真っ赤にして驚き、周囲の注目が集まる。もし此処で他の団員やタケミカヅチが居れば極東とオラリオの文化の違いに気付くのだろうが生憎不在。天然純情娘二人の間で話が進んでしまっていた。

「ま、まだ決定してる訳じゃないけど……受けるの?」

命の問いかけに対して春姫は羞恥で顔を真っ赤にしながらも頷く。命も釣られて顔を真っ赤にしながらも友人に対して笑みを向けた。

「そう。おめでとう、春姫ちゃん。結婚式には呼んでね」
「も、勿論！」
今まで恋愛相談を胸やけがするレベルで受けてきた命は心配せず、迷い無く祝いの言葉を贈る。彼女が選んだ相手なら間違いないと信じた結果だ。オラリオに来てから耳にした噂ではヘルメス・ファミリア団長の『万能者（ペルセウス）』と手を組んで変な物を作っているとか、ギルドと裏取引をして魔石の取引許可を得たとか、一部のモンスターを大量に捕縛して生きたまま解剖していたとか、鍛冶師の腕前への評判は兎も角、奇人変人との噂も多い。
それでも盗賊から春姫以外にも多くの人を助け、身よりのない相手には仕事先を身銭を切ってまで探したというのだから善人の類いには間違いない。何より、同じ恋する乙女として友人の恋は応援したかった。
だが、此処で一つ思い出す。自分が誰に恋をしているか思い起こした事で、ある話題も思い出した。オッタルが上客な関係でフレイヤにそれなりに会うにも関わらず魅了された様子が無いことについて訊ねられた事があるのだが、こんな風に答えたというのだ。
『神と人とは全く別の存在だろう？　魅了とは恋心の一種なのだろうが、美を感じても神相手にどうすれば恋心を抱けるのか理解出来ん』

「春姫殿、もう少しゆっくり考えた方が良いのでは？」

タケミカヅチに恋心を抱く命からすれば面白くない意見であり、思い出した瞬間に口調を普段に戻して前言を撤回するのも致し方ないのかも知れない。そういった相手だと理解して関係を持っているのか、恋心ではないとしているのか、はたまた彼に理解など求めていないのか、有力な説としてフレイヤの意見かオッタル達は付き合いを変えないが、ヘファイストスに恋心を抱くヴェルフも暫くは口を利かなかったのだから。

だが、春姫も恋する乙女。盲目になったというか勘違いに気付いていない彼女は急に意見を変えた友人に驚きながらも予定のない求婚を受ける気なのは変わらなかった。

「ううん。昨夜一晩考えた結果だから。私はヴァルツ様の求婚をお受けします。確かに変わっているし、ネーミングセンスが壊滅的ですが、春姫にとってあの方は英雄なのです」

何度も記すが彼に求婚の意志はない。椿の悪戯は物事を予想以上に難しくしていた。だが、知らされても絶対に反省しないだろう。

「……実に素晴らしい時間だった。五百万ヴァリスは安かったな」

一日命懸けで一万ヴァリス程度の収入を得ている下位冒険者からすれば業腹物の事を呟きながらヴァルツはヘルメス・ファミリアのホームを後にする。他の派閥、それも朝からアポなしで来たとなれば叩き出されても穏便な対応だが、団長であるアスフィと彼が怪しげな打ち合わせをするのは見慣れた光景であり、得る物が多いので団員はスルーである。

全員の認識はただ一つ。これだから天才は……、である。

だが、主神には事後報告が多いのでヘルメスは兎も角へファイストスは頭を痛めるのは間違いない。だが、ヴァルツは反省しないだろう。技術や知識の探求のため、多少のお説教は平気だった。過去に一度暫く謹慎処分を受けた時は流石に反省したらしい。

彼の手には百円ライター程の大きさの金属板が握られており、ミスリルの様だが溶かした後で何かを混ぜ込んでいる。これが先程までアスフィと打ち合わせをしていた何かの制作に関わっているのだろう。手の中で弄んだ後で懐に大切そうに進んだ時、反対側から買い物途中のアイズ達がやってくる。その中には春姫の姿もあった。

「あ、あの、本当に良かったのでしょうか、ティオネ様。わざわざ服を買って頂くなんて申し訳無いのですが……」

春姫の手には服が入った紙袋が下げられており、ティオネが代金を出したらしい。アマゾネスの服屋の店名が書かれている事からして露出度が高そうだが。多分、これで迫ればイチコロ、とでも言われたのだろうが、後で絶対に鏡の前で真っ赤になって震える。絶対に迫るのは無理である。

「良いの良いの。春姫の魔法に慣れる為って何度もダンジョンに連れて行ってるし、ティオナなんて思いっきり力を使いたいからって話も聞かずに連れて行ってるじゃない」

「えー？　一応十八階層までで止めてるじゃん。彼処で水浴びすると気持ち良かったでしょ？　ランクアップしたお祝いと思えば良いよ」

春姫の魔法は対象のレベルを上昇させる『ウチデノコヅチ』。主にティオナ（次点でアイズ）がランクアップした時の気持ちを味わいたいと水浴びにいく度に同行を強請り、遠征でも切り札となるので昇格した身体に慣れる為と他の幹部にも同行をさせられてサポーターといえども経験値は入っていった。そして先日の遠征で稼いだ経験値でランクアップに至ったのである。

「……大変でございました。ええ、本当に……」

一応装備は整え、ティオナが守っていてくれたものの、殆ど有無を言わさずにダンジョンに連れて行かれ、シルバーバックの群れに囲まれてそれをティオナが両断したり、ミノタウロスが一斉に向かってきてそれをティオナが一掃したり、ティオナに担がれて何階層も上級冒険者の全力の速度で駆け抜けたり、後はティオネの豹変ぶりというか本性を目の当たりにしたり、アイズの無茶に驚かされたり、主にティオナの破天荒さに振り回される日々だった。

無論、魔法に頼りきりでは駄目だとリヴェリアにスパルタで勉強を受けたり、接近戦の鍛錬として小刀の稽古をしたりなど頑張ってはいた。頑張ってはいたのだが、周りが凄すぎて本当に大変だったのだ。遠い目で明後日の方向を見ていた春姫だが、視界にヴァルツの姿を捉えた瞬間に耳と尻尾が動き恋慕の情が顔に浮かび上がった。

「……うわぁ。フィンに対するティオネみたい。ほら、行って来たら?」

「ひゃっ!?」

ティオナにやや乱暴に背中を押され春姫はバランスを崩しながら前方に向かうもついに転びそうになり、直前でヴァルツが身体で受け止める。丁度抱き止める形となり、近距離で彼の顔を見上げる彼女は既に言葉を吐く余裕すら無いらしい」

「あ、あぅぅ……」

「ああ、丁度良かった。約束した祝いの品だ。椿から紹介された職人に依頼した櫛だが……受け取ってくれるか？」

ヴァルスは春姫を抱き止めたまま包みを取り出して差し出す。この時、春姫は羞恥と嬉しさで完全にパニックに陥り、自分が今何処にいるのかを完全に忘れさっていた。包みを差し出したヴァルスの手を包み込むように手に取り、一杯一杯の様子で言った。

「あ、あのっ！　子供は何人作りましょうかっ!?」

周囲にはアイズ達以外にも買い物中の人や神、店員が沢山居て、大声で叫んだので注目が二人に集まっていた。暇を持て余している神々は叫んだのが誰か確認するなり走り去り、きっと噂を広めるのだろう。尾鰭背鰭は必ず付く。間違いなくだ。

「……すまない。話に着いていけないのだが……」

ヴァルツは色々な意味で困った顔をするのであった……。

第五話

「え、えっと、先ずは夫婦二人きりで愛を育むという事でしょうか？　わ、分かりました。……ヴァルツ様の望むがままに頑張ります。ですが最初は優しくリードして頂けると……」

育ちが良い春姫ではあるが家を勘当されたのが十一歳の時で、現在は十六歳。当然、そういった知識は派閥の仲間から聞いたり本を読んだりで手に入れている。未だキスすら未経験で行為に関しては見たこともないが、以前ヴァルツの鎖骨を目撃して気絶した際、淫夢を見て現実とごっちゃになる程だから内心興味は有るのだろう。

ヴァルツから櫛を渡されるという祖国の求婚方法をされた返事である、子供が何人欲しいか、に対してどう言うことかと訊ねられた結果、割り出したのは上記の結論。未だ子供は早いと予定にすら入れていなかったとの判断だ。よくよく考えれば自分は未だ十六歳。母親の幸せの前に女としての幸せを与えたいと思っているのだと判断した。

尚、勘違いである。ヴァルツはその求婚方法を知らないのだから困惑するばかり。人前でその様な事を言われては恥ずかしいし、場所を移すのが最適だと判断した。

「……取り敢えず家に来い。貰い物のケーキが有るからお茶にしよう」

場を切り替えて状況を変えようとするヴァルツ。落ち着ける場所で詳しい話を聞き出して、何やら勘違いされている様なので誤解を解こうとするのだが、どうもそれを許して貰えないようだ。

「け、結婚前にエッチな事をしようなんて不潔です！　駄目です、見過ごせません！」

此処で更なる混沌が投入。生真面目で春姫同様に妄想癖があるレフィーヤがどんな結論に至ったのか真っ赤な顔で叫んで場を更に混乱させ、騒ぎが更に大きくなった。だが、此処で助け船が思わぬ相手から入る。状況を飲み込めないアイズとティオナを放置してティオネがレフィーヤの口を塞いで止めた。

「はいはい、落ち着きなさい。ヴァルツ、私達の分もお茶を頼めるかしら？　喉乾いちゃって」

「……感謝する」

貸しは高く付くわよと視線で語るティオネ。一刻も早く事態を収拾したいヴァルツは少し理不尽に感じるも承諾するも、実際に理不尽である。だが、駆け引きが別段得意な訳ではないヴァルツは文句も言わず、未だパニック状態で妄想の世界に入っている春姫の手を持って先導する事しか出来ない。その背中を見て上手く行ったとほくそ笑むティオネではあるが自分と違って恋愛が順調な姿を見せられるのは面白くなかった。

「って言うか何の躊躇いもなく手を繋いだわね、彼奴……」

オラリオの住宅街の外れにある庭付き一軒家がヴァルツの家だ。主に工房で過ごし、休む時以外は滅多に帰らないにも関わらずそれなりの大きさの家を購入したのには理由がある。

「うわぁ。本が沢山！　あっ！　あれってわたしも好きな奴だ」

英雄の活躍する話が好きなティオナが一目で夢中になる程の大量の本、それがヴァルツが家を購入した理由だ。鍛冶を始めとした各種技術本や武術の指南書、伝承を記した物語までジャンル毎に分けられた無数の本。蔵書数ならロキ・ファミリアの資料室にさえ匹敵するであろう冊数の上に普通に出回っていない古書や単純に紙を紐で纏めただけの何処かの家の倉にでもしまわれていた文献のたぐいらしき物まで存在し、何度も来た事のある春姫以外の面々は圧倒されている。

「あれって絶版になった筈のエルフの伝承を纏めた幻の一冊っ!?　……あの、どうして此処まで本を集めていらっしゃるんですか？」

どれだけ探しても見つからなかった希書をあっさり発見して意識を奪われつつもレフィーヤは浮かんだ疑問を口にする。少なくとも鍛冶には些かも関係がないようにし

か思えず、何日も工房にこもる職人の彼と家中に存在する本の山が結び付かない。アイズやティオナも同様だが、どうもティオネには心当たりが存在する様子だった。断言するには朧気な記憶だが、ベートが彼の発言を語っていたのを思い出したのだ。

「何が発想の起点になるか分からないからな。英雄の行動、薬品の反応、ありとあらゆる手を尽くさねば届きたい場所には届かない。それだけだ……」

「届きたい場所？　やっぱり神の領域とか？」

未読の本を見つけたのか視線を伝承や物語の棚にチラチラと向けつつもティオナが言ったのは多くの鍛冶師が目指す場所だ。人の身で神の領域を目指すという大言で誇大妄想じみた夢ではあるが、それでも追い続け挫折する者や片鱗を掴んだ者、至ることが出来た者が存在する。だから発想としては当然の物だがヴァルツは顔を横に振って否定した。

「目指さぬのは論外で、至っても尚、半ば。多くの鍛冶師が目指す神の領域、俺はその領域に至った者さえも見上げる場所にたどり着きたい。それが叶ったのなら更に先へ。……俺からすれば終着地点を決めている奴が信じられん」

だが、ヴァルツの周囲は違った。鍛冶の技を教え込んだ父や祖父も、鍛冶について熱く語る同僚も、皆彼の夢を聞けば変人を見る目を向ける。神の領域こそが至高であると信じ、その先の高みがあると思考すらしない。それが彼にとって不満だった。

不満が顔に出ていたのか神でなくとも彼が本気で言っていると感じ取った面々が唖然とする中、最早慣れたとばかりに唯一本棚が置かれていない客間へと手招きするのであった。

「こ、このケーキはっ！」

宝石の如く輝くフルーツが盛られたタルト、雪を思わせる粉砂糖をまぶした皮はサクサク中は舌触り滑らかで濃厚ながらしつこくない味わいのカスタードクリームのシュークリーム。ほんのり狐色のクレープ生地を何層も重ねて生クリームを挟んだミルクレープ。遠征中は決して食べる事の出来なかったスイーツがテーブルに所狭しと並べられ、食べて食べてと訴えかけて来るようだ。

そして甘いもの大好きなレフィーヤは見抜いていた。これら全てオラリオでも屈指の人気店の商品で、開店前から並ばないと買えず、並んでも買えない事さえあった品々。中には未だに口にしていない超人気商品や新商品まで当然のように存在し、思わず目を輝かせた。

「昔盗賊から助けた子供が就職していて、二十の誕生日に持ってきてくれたが別の店の者も同様に持ってきて食べきれず困っていた。遠慮せずに食べてくれ。まだ冷蔵庫に有るから持って帰ってくれれば助かる」

「そ、そうですか！　では遠慮せずに頂きます」

困っているからと言われたのを免罪符に、先程までの悪印象など捨て去ったかのようにケーキに手を伸ばす。普段は多くても二個で済ませるし、多く食べていたらリヴェリアから小言を言われるだろうから無理だが遠征中に食べられなかった事もあってカロリーの事は完全に忘れ去る。たとえ体重計に乗って後悔する事になっても今この時はスイーツの海に溺れたかった。

後日後悔の海に沈むレフィーヤと同様にスイーツを食べ進めるティオナ、黙々と最初の一個を食べているアイズと一個食べた後は手を着けないティオネ。春姫は二個目を食べるかどうか迷っており、町中でした騒ぎなど忘れ去ったらしい。

「さて、食べながらで良いから確認したい。子供云々は俺が櫛を渡した事に関係しているのか？」

此処で空気を読まずに爆弾が投下され、モンブランの栗から食べようとしていたレフィーヤとプリンに手を伸ばした春姫双方の手が止まる。この時点でティオネは何か

すれ違いが起きているという自分の予想が的中したのを悟った。

「……あぅぅぅぅう」

「い、今にして思えば街中でなんて事を……」

勘違いは修正され二人はクッションで顔を隠しながら悶えている。春姫は兎も角として、レフィーヤの方は割と自業自得な感じではあるのだが。もう少し落ち着いていれば被害者は春姫だけで済んだだろうに後の祭りだ。

「それは兎も角として春姫。あの流れからして俺が求婚すれば受けていたと解釈して良いのだな？　……なら、交際から始めないか？　恋人になろう」

そんな中、暫く何かを考えていたヴァルツは春姫に手を差し出す。更に羞恥で顔を紅潮させて言葉さえ出ない春姫であったが、クッションで目から下を隠しつつも差し出された手を取って頷いた。

「……口の中がジャリジャリするわね。って言うか二人っきりの時にしなさいよ、そう

いうのは」
「……私達忘れられてる?」
「次はエクレアにしよーっと!」
　口々にコメントを述べる三人。レフィーヤは目の前の光景にキャパオーバーを起こしたので気絶している。恐らくはアイズに告白する夢でも見ている事だろう。

「あかんっ！　なんか面白いシーンを見逃した気がするで、ママ!」
「……何を言っているのだ、ロキ。それと誰がママだ、誰が。それよりもだ……どうもイシュタル・ファミリアがきな臭い。注意しておかねばな」

第六話

「この機会に聞きたいんだけど、アイズが腕輪を借りたがるのってアンタの成長速度に関係しているの？」

ヴァルツの交際の申し込みを春姫が受ける一部始終を見せられてげんなりとした気分のティオネ。見ていただけにも関わらず恥ずかしさで気絶していたレフィーヤの頭を膝に乗せた所、何やら感じる物があったらしい表情のアイズであったが思わず反応してしまう。

慌てたようにビクッと身を竦ませ明後日の方向を向きながら口笛を吹く姿など肯定しているに等しく嘘をつき慣れていないのが伺える。誤魔化すのは無理な状況であった。

「……何でそう思う？　俺もダンジョンに向かっているが？」

「頻度が違うでしょう、頻度が。時々ダンジョンの下層とかで会う時も有るけどフレイヤ・ファミリアの連中にサポーターとして同行させて貰ってる時位で、他は日帰りで帰ってこられる深さでしょ？」

一応探ってはみたヴァルツだが言われてみれば行き当たるのも納得だ。モンスター

の生態を観察する為にオッタルや小人の四つ子達にサポーターとして同行を願い出て、彼らもファミリア構成員間の仲が悪いので彼らのＬｖ．５という力、連携すれば更に一個上の段階に相応しい稼ぎ場所に連れていける力量のサポーターは居ない。誰しも抜きん出て主神の寵愛を、と思っているのだから。

故に魔石やドロップアイテムをそのまま渡せば良いので誰か雇って分け前の分が減る事もなく、ランクは下だが自衛もある程度出来るヴァルツの申し出は都合が良い。後は料金を踏み倒すために見殺しにしたという主神の名に泥を塗る事態にならないように最低限守りながら経験を積むだけだ。ヴァルツも発展系アビリティ上昇の為にランクアップの経験値は稼ぎたいし、実践での動き方を知って動かしやすい武器防具の制作の役に立てる。

だが、あくまで彼らに手持ちの金が無い時とヴァルツが奥に潜りたい時が重なった時のみであり、他の上級冒険者と比べれば潜る深度も頻度も違う。故にアイズが何度も借りたがる事と合わせてティオネは答えを導き出した。

「……それで確かめてどうする？　既に神ロキも存在は知っているし階層主のレアドロップを使っているから制作は難しいのだが？」

「別にどうもしないわよ。逆に量産可能でフレイヤ・ファミリアに渡ってたら面倒って思っただけ。春姫から聞いたけどアンタが相手を二つ名で呼ぶのは鍛冶師と顧客とし

ての線引きで制作に私情を挟んで腕が鈍らない為でしょ？」
「ああ、探りを入れた訳か。確かに、鉄遊びでもしていろ、等と述べたので絶対に客として扱わないアレンを除き、二つ名で呼ばない上級冒険者は協力者のアスフィ位だ。……春姫、お前は名前で呼ぶぞ。愛する相手だからな」
「嬉しいです、ヴァルツ様。愛するお方に名を呼んで貰えぬなど想像するだけで……」

「……あのさぁ。イチャイチャするなら二人きりの時にしてくれない？　取りあえず帰るわよ、皆。春姫も今日は晩御飯も当番だから遅れるとどやされるわよ？」
未だ気を失っているレフィーヤを担ぎ上げたティオネに言われるがまま帰って行く一行。玄関を出る直前、名残惜しそうに振り返った春姫は勇気を振り絞った。

「あ、あの！　恋人になった事ですし、今度、で、でぇとを致しましょう！」

「所で愚弟（ヴェルフ）、お前は何時になったら主神殿に思いを伝える気だ？　既に何人かは伝えているぞ」
「うっせぇなっ！　俺には俺の都合ってのがあんだよ、兄貴！　自分に恋人が出来たからって、つーか今まで恋人じゃなかったのかよっ!?」
「現状に満足しているような事を言ったが……一歩進んでみると良いものだぞ？　明日、早速デートの約束だ。お前との先約がなければ今日行っていた」
　未だＬｖ．１であるヴェルフだが同僚と不仲なので一緒にダンジョンに行く仲間が居ない、ヘファイストスから弟の問題を聞かされたヴァルツはソロで潜っている他のファミリアの冒険者を誘いやすいようにと中層まで同行させていた。
　ヘルハウンドという業火を吐くモンスター対策の装備もお古と言ってわざわざ古びた見た目に作った物を渡し、あくまで哀れだから中層での鉱石採掘を手伝ってやる、弟には本心が見抜かれているにも関わらず上から目線で言いながらだ。実際兄であるしファミリアでの立場も鍛冶師としても上なのでヴェルフも指摘はせず、不承不承と言った演技を兄より上手にこなしている。
「せいっ！　……しまった」
　既に十六階層まで到達した二人だがミノタウロス四体とアルミラージ複数と遭遇、

ヴァルツが前方のミノタウロスを担当するも三体は大金剛の横一閃で腹部を両断するが最後の一体に放った突きが魔石を直撃したらしく名にも残らなかった。付けた名前がお洒落すぎて（と兄弟間では思っている）性能が良くても尻込みされて売れず、禄な素材が購入できない弟の為に少しでも買い取り金額が欲しかったヴァルツからすれば痛恨の失敗だ。

「おい、兄貴！　こっち手伝ってくれっ！」

「やれやれ仕方ない。鍛冶も戦いも未熟な弟め」

正直、照れ隠しにしても言い方をもう少し考えろと思うヴェルフの目の前で石斧を持った巨大な兎のモンスターが剣の一振りで絶命する。扱い方を知らなければ扱いやすい武具など作れないという持論による鍛錬と自分の制作物を扱う時に補正がかかるスキルによってヴァルツの剣の腕は冴えていた。当然、アイズ達のように本職の達人には劣るが、鍛冶師が本職なのだから十分だろう。

「兄貴、もう鉱石は結構採掘したけど帰らなくて良いのか？」

戦闘後にダンジョンを進み十七階層。地図を頼りに採掘場所を回り運良くドロップアイテムも道中で大量に集まったので鞄も一杯だ。ランクアップして意気揚々と乗り込んだ冒険者を死に誘う中層での経験は役に立つだろうと思いつつヴァルツは考える。この頑固な弟に取り分を多く渡すにはどうすべきかと。

「ああ、そろそろ帰る頃……いや、ちょっと待て」
　遠くから聞こえてくる何かが崩れる音と怪物の咆哮、大勢の冒険者達の騒がしい声。階層主ゴライアスが復活する周期でありリヴェラの街の住民が邪魔だからと討伐に出たのだと察するなりヴァルツは駆け出した。
「着いて来い！　上質な経験値を稼ぐ絶好の機会だっ!!」

「ゴォオオオオオオオオオオオオオッ!!」
　十八階層に続く道の直前に存在する嘆きの巨壁から唯一生み出される巨人型モンスターのゴライアス。Ｌｖ．にして四相当とされる難敵に挑む中心となったのは一同の中で二人だけＬｖ．３のヴァルツとリヴェラの街を仕切るボールスだ。耳をつんざく大声を上げながら駄々を捏ねる子供の様に地団太を踏む足をかいくぐってヴァルツが大金剛で右の足首を斬りつければボールスも反対側に武器を突き刺す。
　無視できない苦痛を与えた人間を潰そうと振り下ろされた拳を跳んで避けたヴァルツは腕を足場に駆け上がり、掴み掛かった手を再び跳んで避けると顔面間近まで一気に迫る。

「咆哮(ハウル)だっ！」

巨人の口内に収束される魔力。空飛ぶ魔法でもない限り回避不能の一撃は不意に起こった魔力爆破によってゴライアスの口内を焼いて終わった。相手の魔法などの発動にあわせて発動、魔力を暴走させるヴェルフの魔法だ。そして柄を持って振り上げたヴァルツの大金剛の刃は変形し大剣から巨大な戦鎚へとなっていた。人体の急所である眉間に叩きつけられる超重量の一撃に骨が砕け怯むゴライアス。苦し紛れに振った手が空中で落下中のヴァルツを捉える瞬間、再び変形して巨大な盾に変化、地面に叩きつけられるも直撃は避けた。

眉間に受けたダメージが深くゴライアスの足がフラフラと頼りなく揺れた瞬間、詠唱を終えた後衛の魔法の一斉放射が叩き込まれる。炎、雷撃、氷、様々な魔法を喰らい続けたゴライアスの意識が朧気になって深手を負った右足だけで身体を支えた刹那、ヴァルツの持つ金属の長い鞭が手首に絡みついた。

これが彼が制作した第一等級武具『大金剛変化自在丸秋雨雲水δⅢ』、略して大金剛の能力である形態変化。使い手の意志で形状、質量、体積が違う複数の形態に自在に変化させられるのだ。

「今だっ！　引けぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ!!」

　その叫びと同時に冒険者達は鞭を掴んで一斉に引っ張り巨人を引き倒すと死んだ虫に群がる蟻のようにゴライアスに武器を構えて襲い掛かった。暫く振動と悲鳴や怒声が響き、最後に巨人が絶命すると同時に歓声が上がる。皆、それなりに怪我を負ったが達成感に満ち溢れていた。
　その後、魔石を取り出した所で場を仕切っていたボールスにヴァルツは近寄って最近完成したばかりの魔具を見せた。ユニコーンの魔石と角を加工した特性の籠手、痛いの痛いの飛んでい拳である。
「所でボールス。実はこういった物があってな。俺の取り分は要らないから実験に付き合ってくれ。モンスターで何度かは試した」

「痛いの痛いの飛んで行けー！　痛いの痛いの飛んで行けー！」
　殴った威力がそのまま回復力に変換されるが、そう叫ばないと効果が落ちる上に衝撃はあるので転んだらダメージが有るからと怪我人を左右から掴んで支えた状態で殴っている。怪我は実際に治っているので治療行為の一環だが傍目にはリンチにしか見え

ない。

「……酷え光景だな、おい」

ヴェルフの呟きはその場にいた者全員（但しヴァルツ除く）の共通の想いだった……。

第七話

ダンジョン十八階層、モンスターが出現しないその場所の一角に墓があった。正義のファミリアとして悪を討ち滅ぼし、最後は悪の手で壊滅に追いやられた彼女達の生き残りであるリュー・リオンは静かに墓石の手入れを行っていた。

復讐のため、悪人を、悪人の疑いがある者を、知らずに協力した商人を、憎悪に突き動かされるままに屠ってきた彼女も今ではお尋ね者だ。今は姿を僅かに変え、気が付いている者も素知らぬ振りを続けて豊穣の女主人で働いている。

そんな彼女が帰ろうとした時、十七階層との境目周辺で騒ぎが起きていた。階層主の復活時期だと思い出し、フードを被って姿を隠しながら様子を伺うことにする。誰か死者が出そうな時にだけ力を貸し、他は極力目立たぬようにする筈だったが目の前の光景に絶句してしまった。

「ボールスさん、此奴で最後です！」

「よーし！　安全のために押さえとけ！」

ゴライアスの討伐後と思わしき様子だが怪我人は今両側から抱えられている者一人。他の者は血や土埃の汚れこそあれど怪我は見受けられず、後ろ姿や装備のせいで誰かは

分からないが怪我人を集団でいたぶろうとしている風にしか見えない。判断を下した瞬間、リューは装備である木刀を構えて飛び出していた。

「不埒者め、恥を知れ」

「……邪魔をするな」

飛び出した時に誰かが叫んだ為に不意打ちの一撃は籠手で防がれ、反撃を受ける前に後ろに跳んだリューは囲まれぬように気を払いながら敵を観察、戦力を分析する。

（先程の男は恐らくＬｖ．３の上位。他は３が一人に２が複数。先ず、先程の彼を……!?）

リンチにされる寸前を助けた筈の冒険者も突如乱入したリューを敵と判断した様子で武器を構える。理解不能な状況で彼女の思考は乱れる。言い表せぬ焦りと恐れがＬｖ．４まで上り詰めた彼女の心にこみ上げてきた。

何らかの魔法での洗脳……直前まで殴ろうとしていた上に乱入後に発動の様子は無いと否定。つまり理外の何かによる要因が存在し、誰が操っているのか操られているのかも不明。最悪自分も洗脳を受ける可能性さえあると判断を下した時、先程の男、よく見れば知人の変人が何やら納得した様子の顔をしていた。

「皆、彼女は敵じゃない。何か誤解をしているようだ」
「どういう事か説明をして頂けますか？　怪我人を押さえつけて殴ろうとなど尋常ではありませんよ？」
「いや、俺は治療をしようとしていただけだ」
「……すみません。意味が分かりません」
だろうな、この場でヴァルツとリュー以外の誰もが心中でそう呟いた……。

「この籠手で殴って治療する所だったのだ」
「すみません。意味が分かりません」
繰り返すが二人以外の皆が同感であった。

「……成る程。私の短慮による誤解だったのですね。何故か納得は行きませんが」
「……だろうなあ。ぶっちゃけ兄貴が悪い」
攻撃を受けたのは自分だけなので話はこっちで付ける、ボールス達にそう言ってリューと共にダンジョンの外を目指す道すがらに魔具の効果について説明された彼女

は釈然としない思いを抱えながらも高潔なエルフ故に非は認める。だが、怪我人を殴って治療するなど誰が一目で理解できるのかとヴェルフから援護が入れば今度はヴァルツの方が釈然としない思いを抱える事になった。

恐らく春姫でないかぎり満場一致でリューの援護をするだろう。リューが第三者でもそうするのだろうが、勘違いで襲い掛かった事実には変わりがない。償いをしなくてはと思うのは当然であった。

「何かお詫び？　ああ、ならば偶に手合わせを頼みたい。他のファミリアには頼み辛く、手応えのあるモンスターが出る階層まで行くのは手間だからな」

リューとしても問題はなく即座に承諾される。今後、早朝の時間に豊穣の女主人の中庭で模擬戦を行う二人の姿があった。

「明日は初デート……緊張して参りました」

黄昏の館の自室にて着ていく服を悩んでいる春姫。今まで何度も一緒に食事に行ってたじゃないのと同室の仲間が呆れるが、恋人になる前と後では気持ちが違うのか緊張が見て取れる。それ以上に顔は幸せそうに弛みきっていたが。

ずっと好意を抱いていた相手から交際を申し込まれた事は彼女にとって人生で最上に思える喜びであり、不満があるとすれば想いの伝え方をちゃんとしたかった、それだけだ。何を着ていっても誉めてくれるだろうが、どうせならば少しでも綺麗と思って欲しい。手持ちの服は肌の露出が少ない物が多いが、ふと手に触れたのはティオネから贈られたアマゾネスの店の服。

「流石にこれは……ヴァルツ様の家で着て、ヴァルツ様だけにお見せしましょう」

下着同然の服を手にとんでもない発言が自然と呟かれ、同室の彼女は天然純情エロ娘の称号を心の中で春姫に送る。見ているだけで砂糖を吐きたくなる気分なのだから告白のシーンを見せられたアイズ達は如何程かと思った時、一つ懸念事項を思い出した。

「ロキは大丈夫？　春姫たんは誰の嫁にもやらーん、とか言わない？」

「そ、その場合は春姫・クロッゾではなくサンジョウノ・ヴァルツになるのでしょうか？

わ、私はヴァルツ様の妻になれるのならばどちらでも……」

「違う、そうじゃない」

頬に手を当てて婚姻の事まで想像して赤くなる春姫。次第に妄想が進んだのか新婚初夜らしいシーンの言葉を呟きだしたので見ていた彼女は苦いコーヒーを飲みに食堂へと向かう。戻った時には子育ての段階に進んでいた。

『怪物祭（モンスターフィリア）』、闘技場にてモンスターを大勢の市民の前で調教して従わせるというガネーシャ・ファミリアとギルドの共同で進められる催し物で、出店などが賑わい大勢の市民が集まる大規模なイベント。だが、デートだというのにヴァルツと春姫は闘技場に向かっていなかった。

オラリオには神だけが使える大浴場の他にも公共の大浴場が存在してそれなりの盛況を見せるのだが、正式オープン前からその施設は神や人の注目を集めていた。一流の職人に発注した彫刻などの内装に極東やエルフなど国々や種族特有の浴場を再現した各種入浴施設。湯上がり後の食事やお茶を楽しめる設備まであり超高級施設最大の売りは……温泉であった。

正確には天然の温泉ではなく、ヴァルツが中層で発見した未発見領域の温泉の岩とそこを住処としている魚型のモンスターのドロップアイテムを素材にしたハンマー『温泉ハイグレードF』の能力によるものだ。十八階層から切り出してきた水晶から湧き出る水が各種効能の高い温泉へと変化し、水風呂にも使われる。当然、水晶も内装に使われていた。

「闘技場に向かわないと聞かされた時は驚きましたが、まさか此処だったとは……」

「正式オープン前にＶＩＰ会員だけ先行招待しているが、オーナーが俺と同伴者一人も招待してくれてな。……喜んでくれて何よりだ。お前の喜ぶ顔だけで俺は幸せになれる」

並んで足湯に浸かりながら二人は語り合い、自然と手を相手の手に重ねようとして宙でぶつかり合う。互いに気恥ずかしそうにそっぽを向きつつも今度は春姫の手を下にして指を絡ませながら重ね合った。

「きゃー！　今の見た？　聞いた？　これだけで来た価値があったわね！」

「うーん。女神には目もくれず恋人だけを見つめる……良いわね！」

さて、当然だが客は他にも居る。この場で二人の様子を遠巻きに観察するのは女神達、それも上位ファミリアの主神で資金が潤沢な者達だ。後は何とか女神とお近づきになりたいと企む金持ちの男位で男神は数える程にしか居ない。お金があるファミリアの主神も、別に潤沢でない資金を着服する主神も別に使う場所が有るのだ。

他人の恋愛を眺めてキャーキャー騒いでいた女神達だが足湯コーナーに入って来た

女神を見て表情を変える。嫉妬がマジマジと浮かぶ視線を向けられて尚物怖じせずに優雅に歩むのはフレイヤと同じく美を司る女神、娼婦を束ねる歓楽街の支配者イシュタルである。

恐らく端切れでさえも零細ファミリアの主神の手に入らないであろう施設貸し出しの衣装で褐色の肌をした豊満な肉体を隠しても溢れ出る美は隠せない。イシュタルは背後に眷属の女性の中で最も強いアマゾネスのアイシャを率いヴァルツ達の正面で足を湯に浸らせた。

「……久し振りじゃないか。なあ、奇跡の鍛工（カオスメーカー）？」

「ああ、例の事情聴取の時に顔を合わせた以来だな、神イシュタル」

多くの男を一目で魅了する美神。だが、フレイヤ相手同様にヴァルツは淡々とした態度で応対した。イシュタルは面白くなさそうに鼻を鳴らし、指先を春姫に向けると笑みを浮かべ本気の魅了をヴァルツただ一人に向けて問い掛ける。

「それが噂の恋人か。所で……そいつと私、どっちが美しい？」

「春姫だ。と言うより、その問いに恋人である春姫と答えない事など貴方が司る愛への侮辱だろう？　恋人を選ぶ美神への侮辱か、恋人を蔑ろにする愛の女神への侮辱か、選ぶなら俺は前者を選ぶ」

第八話

　美を司る女神に対して向けられた、他の女の方が美しい、という言葉。耳にした女神達はイシュタルに嫉妬し忌み嫌う者でさえも戦慄し、下を向いて震えている主神の顔は分からないが眷属のアイシャは戦々恐々、話題を向けられた春姫はこみ上げてくる嬉しさと恥ずかしさと恐怖で混乱するも肩を抱き寄せられた事で平静を取り戻し、次の瞬間には羞恥心で思考が沸騰する。

「ひゃっ!?　…きゅう」

「むっ。のぼせたか、春姫？　仕方ない、休憩室に運ぼう」

　現状を作り出した犯人であるヴァルツはというと周囲の反応など素知らぬ顔で春姫を姫抱きにして場を後にしようとする。現状、女神達からすれば場の空気は最悪だ。眷属のアイシャは勿論、彼女達も確かに有力な眷属は多いが上位ファミリアには一歩も二歩も劣るとは言えイシュタル・ファミリアに八つ当たりされては堪らないと我先に去ろうとするが、何を血迷ったかヴァルツがイシュタルを振り向いて声まで掛けた。

　この瞬間、気絶した春姫を除いた二人以外が一斉に凍り付く。お前、何を言う気だと大いに焦り俯いたままのイシュタルに視線を向ける。特に逃げる訳にも行かないアイ

シャ等は顔の色が蒼白間近だ。

　正直言ってイシュタルのヴァルツへの印象は良くないとアイシャは認識している。彼が五年前に討伐した盗賊の証言で人身売買を行っていた交易所が摘発を受け、証拠は見つからなかったがイシュタルが何度も出入りしていたとギルドに目を付けられた。結果、他の冒険者を攫って薬で犯して廃人にまで追い込んでいた前団長が手配され逃亡。今も歓楽街にギルドが強く目を光らせている。

　故に仇敵のヴァルツの発言の反応が恐ろしかったのだが……。

「……何か面白い事でも言っただろうか？」

　この時、正面に居なかった者達にもイシュタルの表情がはっきり見えた。彼女は普段の余裕も女神としての矜持も捨て去り、可笑しくて堪らないという顔で笑いを堪えていたのだ。そして遂に限度に達したのか女神としての矜持も明後日の方に投げ捨てて大いに笑い出した。

「……くくく、はははは……はーっはっはっはっはっ！　ひいひい、そりゃ確かにそうさ！　美貌に負けて愛を捨て去るなんざ、それこそ私への侮辱だよ！　は、腹が痛い！　こんなに可笑しいのは久し振りだよ！」

　人目もはばからず足をバタバタ動かして爆笑する姿にアイシャも女神達も唖然とし

て向けていた感情を忘れ去る。最後の誇りなのか転げ回って笑いはしないがイシュタルはその寸前まで行っていた。

そもそも自然界において美とは何の為に使われるのか？　繁殖の相手を得るためである。力を競うのは何故か？　それも同じ理由だ。美も、力も、愛を手に入れる為の手段なのだ。つまり愛に比べれば美も力も無価値だと言えるだろう。

イシュタルは美と愛、豊穣と戦を司る女神である。そんな彼女にとってヴァルツが嘘偽り無く述べた言葉は意外な内容であり、何よりもツボに入る。それが今の爆笑の理由であった。

だってそうだろう？　彼女が嫌うフレイヤは他の派閥から気に入った相手を魅了して引き抜く。つまり美貌に負けて別の者に向けていた愛を捨て去るという事だ。他ならぬ愛を司るフレイヤがそれをさせているのだからイシュタルは可笑しくて仕方がない。本人達はフレイヤに愛を向け愛されれば充分なのだろうが、其れと同様に前までは他の誰かと愛を向け合っていた筈だ。友愛にしろ、親愛にしろ、男女の愛にしろ、愛の女神が愛を捨てさせているなど皮肉で間抜けだとイシュタルは大いに嘲笑っているのだ。

「ちょいと気まぐれで来てみれば予想外に楽しかった！　帰るよ、アイシャ。今晩は仕

事は休んで私の奢りで宴会だ。直ぐに準備しな！」
「ちょ、ちょっとイシュタル様っ!?」
　主神の心境の変化を図れず困惑した様子で後を追うアイシャ。追い越されたヴァルツは先ほど視界に入った光景を忘れ去るかのように軽く頭を振り、春姫を休憩室まで運んでいった。何を見たかというとイシュタルは足を大いに動かしており、正面に居たという事だ。彼女の下着については色も有無も記さないでおこう。

「起きたか。大丈夫そうだな」
「えっと、ヴァルツ……様？」
　春姫が目を覚ませば知らない天井の下だったがヴァルツの顔が間近に有る方が印象に強かったので場所は気にならず、今の状況にだけ意識を向ける。具体的には膝枕をされながら団扇で扇がれていたのだった。思わず飛び跳ねた後でもう少し堪能すべきだったと後悔してヴァルツの顔を見れば少し困惑した様子で春姫の顔を見ている。
「神イシュタルから去り際に膝枕でもしてやれと言われたからしてみたが……不愉快だったか？」
「い、いえ、断固違います！　寧ろ嬉しいというかもう少し……もう少し堪能させて頂け

ますか？　恋人として春姫の我が儘を聞いて欲しいで御座います」
　ちょっとだけ拒絶されないかと不安だった春姫だが、ヴァルツが無言で膝を叩いていたので喜んで膝枕を続行する。今度は愛する男の膝の感触を意識しながらそっと目を閉じ、もう少し我が儘になる事にした。
「あ、あの、少しだけ頭を撫でて頂きたいのですが……」
「ああ、構わん。いや、撫でさせて貰いたい位だ」
　そっと頭に手が置かれて優しくなで回される。喜びと今更こみ上げてきた羞恥で再び意識を失いそうになるも必死に意識を保って春姫は今の幸せを噛みしめていた。

「ヴァルツ様、春姫は幸せで御座います」
「俺もだ。お前と過ごせて幸せだと思う」
　春姫が遂に意識を手放して眠ってしまい、ヴァルツが遅くなったからと起こすまでこの膝枕はずっと続く。その間、ヴァルツは幸せそうに微笑んだままであった。

「……良い。本当に……良い」
「同感……」
尚、先程の女神達もずっと眺めていた模様。

「モンスターの脱走か。随分物騒な話だな」
次の日、ヴァルツは怪物祭の最中に起きた脱走と未確認のモンスターをロキ・ファミリアの冒険者が倒したという話をステイタスの更新中にヘファイストスから聞かされた。
オラリオの住民はモンスターと身近な様で遠い存在。ダンジョンにはバベルという蓋があり周囲は高い壁に囲まれて警備の冒険者が外からの侵入を許さない。故に深く関わる機会は怪物祭で調教される姿程度だったが、今回の事で恐ろしい存在なのだと深く心に刻まれてしまった。
「ガネーシャの所は後始末で大変らしいわ。……また神会で面倒な事になりそうだわ。ランクアップよ、ヴァルツ。次の更新でＬｖ．４になれるわ」

ヴァルツ・クロッゾ
Lv．3
力　B：755　↓　A：830
耐久　C：629　↓　B：745
器用　S：911　↓　S：988
敏捷　C：602　↓　B：752
魔力　E：491　↓　D：531
鍛冶　H
神秘　i

「新スキルも一個発現よ。……また面倒になりそう」

恋之守護（ラブブレッシング）
・自分及び愛し合う相手のステイタスに補正
・互いの想いの丈で効果向上
・互いの想いが続く限り効果持続
・想いが消えれば双方共にスキル消滅

一方その頃、ロキ・ファミリアのホームでは……。
「春姫たんにセクハラする口実に更新したら……なんやコレ」
春姫にも同様のスキルが発現していた。

その数日後、ランクアップを行ったヴァルツは身体と意識のずれを直す為にダンジョンに向かう準備をしていたが、路地裏を通った時に黒いフードの人物が現れた。
「また何か依頼か？　……魔石の買い取り許可を得る為とはいえ面倒な」
「お前の魔法は便利だからな。……十八階層で指定した人物から荷物を受け取り解析して欲しい。出来れば持ち帰り、危険と判断したなら破壊しろ」

第九話

突然ではあるがヴァルツは中層が、正確には中層に出現するモンスターの内の二体、アルミラージとヘルハウンドとの戦いが苦手である。苦手と言っても少々複雑な事情があるのだが。

「出来れば戦いたくないが……無駄な話か」

中層に入るなり壁や天井が盛り上がり、アルミラージやヘルハウンドの群れが這い出てくる。本能的な人への敵意を剥き出しにしてうなり声を上げ、天然武器を構えて今にも飛びかかって来そうな姿を見てヴァルツは静かに呟いた。

「クロ……いや、安直だからクロスケガーンボランドランペイジか？　あっちは……シロ吉ＶＲＭⅡだな」

モンスターを眺めながら考えていたのは、もし飼うならばどの様な名前を付けるか、である。当然無理だとは理解している。調教の方法など知りもせず、オラリオのルールでダンジョン外への連れ出しにも規制がある。逃げ出した時に出るであろう人的被害を考えれば問題外の考えだと変人の彼でも理解できる。

だが、彼は動物好きなのだ。自分の生活スタイルからペットなど飼えないし、世話を

させる人を雇うのは何かが違う。モンスターならダンジョンにも連れていけるし、炎を吐くヘルハウンドなら熱気がこもる工房に居ても大丈夫そうで吐き出す炎も鍛冶の役に立つだろうと誘惑の声が聞こえてくる。もしかしたら自分を死に誘うダンジョンの罠ではと、ダンジョンが喋れたら全力で否定しそうな事を考えつつ大盾状態の大金剛を構えた。

今にも炎を吐こうと口を広げて魔力を集中させるヘルハウンドに向かって盾を構えたまま接近、目前で踏み込むと同時に盾を叩きつけた。この時点で頭蓋骨を砕かれたヘルハウンド達は絶命、背後の壁に激突して全身の骨が砕ける。グニャリと弛緩した肉体が壁に血をなすりつけながら地面に落下した時、ヴァルツは盾を鞭に変化させて反転、飛びかかって来たアルミラージを打ち据える。下級冒険者や上級冒険者に成り立ての者からすれば恐ろしいモンスターも第二級冒険者の彼からすれば恐れるに足らず、可愛いと思い抵抗があっても余裕で撃退していた。

「……動物を虐待している気分だな」

なまじ普通の犬や兎と大きく見た目が変わらないので倒した跡の爽快感が無く微妙に良心の呵責を感じるのでこの二匹を相手にするのは本当に苦手だと思いつつ魔石を回収している最中、岩陰に黒い固まりが隠れているのを目にしたヴァルツが近寄れば慌てて逃げ、また隠れているつもりなのか別の岩陰から自分を見ている。その正体は小さ

なヘルハウンドだった。通常の個体が狼程度なら子犬程。此処が外なら繁殖で生まれた個体と判断する所だが、ダンジョンではモンスターの繁殖は確認されていない。

「……ほら」

何より異質なのは本能から来る絶対的な敵意が瞳から感じられず、警戒はしているが興味も向けている事。弁当の中からハムを取り出して翳すと反応して鼻をひくつかせながら視線を向ける。左右に動かせば視線が追いかけ涎を垂らしていた。投げてやれば跳んでキャッチし尻尾を振りながらガツガツと食べ進め、食べ終われば口元を舐めながら何かを期待するように尻尾を振ってヴァルツを見ていた。既に警戒の色は皆無である。

「我が見抜くは森羅万象　この世全てを解析し、全ての神秘を暴き立てる　我に見抜けぬ秘密無し　アナライズ」

リヴィラの街に辿り着いたヴァルツはローブの男の指示通りに酒場に向かい、兜と鎧で姿を隠した男から布に包まれた丸い荷物を受け取った。顔が知られている事もあり街に来て直ぐに帰っては怪しまれるだろうと向かった先は友人であるボールスの店。

鍛冶師を目指していたという彼と酒の席で意気投合し、二つ名でなく名で呼んでいた。
　お茶を出して貰い作って欲しい物が有ると依頼された後で価格の交渉が開始、幾つか条件を結んで決定した帰りに人目の無い所で包みを開けば中身は不気味な赤子が入った宝玉だった。クロッゾが鍛冶貴族と呼ばれていた由縁、分け与えられた精霊の血が何かを感じ取ったヴァルツは魔法で正体を解析、宝玉がどの様な物なのかを知った瞬間に宙に放り投げ魔剣を発動させ炎で焼き尽くした。
「……今すぐに神ウラノスに」
　事態は急を要すると感じながらも先程頭に入って来た情報、宝玉に込められた妄執と呼ぶべき念が精神を蝕む。端から見れば酷い顔色で、ダンジョンを出た時には既に月が天高く上っている。一旦休むべきかと思った時、足元がふらつくも直ぐ近くにいた物に支えられた。
「大丈夫……ではないわね。ちょっと来なさい」
　現れたのはガネーシャ・ファミリア団長シャクティ、二つ名は『象神の杖（アンクーシャ）』。民衆の味方である主神の意志の元に見回りをしていた最中にヴァルツを発見した彼女は顔色を見て尋常でないと判断、仲間と共に彼を連れてホームへと戻る事にした。
　一方、リヴィラの街の酒場では先程宝玉を渡した人物が支払いを済ませて出て行く

所。その隣には顔はよく分からないが女が居て二人はそのまま宿屋に向かう。その様子を眺めていた男達は今から起きる事を邪推し、女の体に卑猥な視線を送るのであった。

「世話になった、神ガネーシャ。やはり生物を解析するのは負担が大きくて困る。いや、今回は類を見ない大きさなだけだがな」
「そうか、所で……俺がガネーシャである！」
「知っている。初対面でもなく、その様な特徴的な益荒男神は一柱だけだろう。見間違えはしない」
　ガネーシャ・ファミリアのホームにて少々休憩を取ったヴァルツは出されたお茶を飲みながらガネーシャに頭を下げる。所で彼は平然と本来は隠すべきである魔法の内容について口にしているが、当然ガネーシャが既に知っているからだ。昔、自分が作った魔具の能力をどうやって把握しているのかを訊かれ、平然と答えて以来何度か頼まれて魔法を使っている。
　その頼み事の内容とは……彼の膝の上で眠そうにしている小さなヘルハウンドに関係していた。

「お眠でちゅかー？　お腹いっぱい食べまちたからねー」
「……その子はアレで間違いないのか？」
「ああ、以前会った彼らと同じだ。言葉は話せんがな」
飼い犬を溺愛する飼い主のような声でヘルハウンドの背中を優しく撫でるとスヤスヤと安心した様子で眠り出す。先程までバックの中に隠れていたこのモンスターの姿を見たのは二人が話しているアレや彼らと呼ばれている存在。余りに特異な存在故に解析を任せられヴァルツが知る由となった。

「……しかし先日の脱走騒動でモンスターへの恐怖心が強まったが、自分達とは全く別の存在というなら神や神に近づいているとされる眷属も同じだろうに。闇派閥や破落戸同然の輩、各地に侵攻を繰り返すラキア。市勢に溶け込め本能以外の理由で牙を向ける後者の方が恐れらないか？」
「確かにその通りではあるが、他の神の前で言わない方が良いぞ？」
「分別は付けてある。特に神ヘルメスの前では絶対に口にはしない。アレは態度にこそ出さないが俺を嫌っているからな。俺も神アポロンと奴は好かん。……どうかしたか？」
神の目前で恩恵を受けた者の一人であるヴァルツが口にした言葉に否定出来ない分、

ガネーシャは複雑そうだ。バベルという蓋で外への流出が抑えられ外のモンスターはダンジョンの同族よりも遥かに劣る。ならば人の理外の精神性を持つ神や、恩恵を受けた者の方が恐ろしいと思われそうだが、少なくてもモンスターという共通の敵が存在するのがそうならない要因だろう。

それは兎も角として一応警告をしておいたガネーシャの表情が一変する。動揺に焦燥、そして悲哀。神としての力が彼に凶報を告げた。

「俺の眷属が……ハシャーナが死んだ」

一部の神を除き、神にとって眷属は愛情を向ける存在。愛の形は人のそれと比べて歪な場合があっても変わらず、ガネーシャは眷属に与えた恩恵の消滅を感じ取り膝から崩れ落ちた。

「……精霊？　間違いないのか？」

「ああ、ロキ・ファミリアが深層で遭遇した芋虫型、この前魔石を解析した花型、その両方が宝玉が寄生したモンスターに魔石を与える為の触手。それが精霊に成長する為の

な。……ああ、ガネーシャ・ファミリアに彼らの同胞を預けたぞ、フェルズ」
　狼狽したガネーシャ同様に眷属達も慌ただしくなったホームを後にしたヴァルツは家に向かう道の途中で黒いフードの人物……フェルズに出会い解析の結果を告げる。有り得ないと話を聞いたフェルズは態度に出し、顎に手を当てて何かを考え込んだ。
「……ウラノスに伝えよう。分かってはいると思うが吹聴は止してくれ」
「ロキ・ファミリアの面々には？　既に芋虫型については知っている。それにフレイヤ・ファミリアが大規模な遠征をしない以上、ダンジョンで遭遇するなら彼らか一人で奥に行く猛者位だろう？」
「ああ、そうだな。じゃあ君の方が信用されているから任せる。但し私達については秘密だ」
　わかっている、ヴァルツがそう返事をする途中でフェルズの姿は消え去る。暫し彼が消えた方向を眺めていたヴァルツだったが眠気を覚えたのか欠伸を一度するなり家に入ってベッドに潜り込んだ。

『リア…アリア……アリア』
『アリア、貴女に会いたい。ああ、一つになりましょう、アリア……』
　この晩、見た夢は宝玉の解析によって入り込んだ悲痛な願い。アリアという名を呼

び、求め続ける誰かの叫び。ヴァルツには酷い悪夢に思えてならなかった……。

「……マジかいな。精霊とかシャレにならんで、ホンマ」

黄昏の館にて出掛ける直前に報告にやって来たヴァルツの報告を受けたロキは頭を抱え、同行する予定だったので部屋に居るベート、ホームに残った幹部のガレスも動揺を隠せない様子。だが、ヴァルツが帰りベートを退室させた後でロキとガレスは更に顔を曇らせる。

「……アリアを求めているかぁ」

「面倒な事になったの……」

その頃、ヴァルツはフレイヤ・ファミリアのホームを訪ねていた。何人かは鍛冶師と

しての顧客でありローンが残っている者も居る。その中にはオッタルも含まれている。フレイヤの側にいる事が多くダンジョンに向かう機会が少ない彼は約束通り素材での支払いが滞っていた。

「今月の支払いがまだだ、猛者。少し面倒事に巻き込まれてな。知らぬ振りは気分が悪い。支払い代わりに力を貸してくれ」

オッタルはフレイヤに忠実な眷属だが義理堅い武人だ。だからゴリラアームＤＸという名にも強く抗議できず、性能が優秀なので支払いについては気が咎めている。今回は完全に弱みにつけ込まれた形だ。……と言うより同じ理由でダンジョンに同行した事は彼以外も何度かあった。

「……仕方無い。フレイヤ様にも支払いについては命じられているからな」

「ああ、お前達は仲が悪いからな。仲間に調達を頼むのも難しいか」

「……否定はしない」

第十話

「ううっ……。やはり露出度が……」

朝食後、鏡の前でティオネに贈られたアマゾネスの衣装（尻尾の穴は加工済み）に着替えた春姫だったが肌面積の広さに思わず胸元を隠してしまう。押しつけた腕で形を変える大きな胸はティオナが見れば憤慨物だろうが、誰かに見られるのが恥ずかしいと同室の団員が出掛けた後に着替えたので当然誰もいない。何度か深呼吸をした彼女は意を決した様に枕の下に隠した本を開く。

『色仕掛け百選』何とも胡散臭いタイトルの本であり、ティオネから借りた本だ。春姫の現在の衣装は上が布地が少ないビキニで下は下着同然の前後に布が垂れ下がっている様な踊り子を連想させる衣装。極東の名家で育ち普段から露出を押さえた服を好む春姫、ヴァルツの鎖骨を見ただけでオーバーフローで気絶した彼女は既に羞恥心で限界だったが勇気を振り絞ってとある練習をしていた。

扉を開けて廊下を確認し、同室の者が何か忘れ物をして取りに帰ってこないか慎重に確認すると本を熟読し、本番で失敗しないように何度も確認の後、実行に移す。

「や、優しくして下さいませ……」

ベッドの上に座って指で口元を隠して上目遣い。僅かに顔を背けてチラチラと相手を見ることを意識する。……何の練習かはお察しである。

暫く鏡に映った自らの姿を眺めていた春姫だが、今度は寝転がって上半身だけを起こし、誘うように両手を伸ばす。顔には余裕を保つ……少なくても本人は今の表情が保てていると思っていた。実際はどうあれ、本人は。

「つ、次は……どうぞお好きな様に。春姫はヴァルツ様の物で御座います」

続いて四つん這いになり余裕綽々と（実際は違う）挑発的な笑み（のつもり）を浮かべ舌なめずりをしながら言い放つ。

「春姫に全てお任せください。今宵は寝かせませんからお覚悟を。……一滴残らず搾り取って……」

「春姫、確か炊事当番は暫く先だったよね？　ならダンジョンに……」

この時、余裕が出てきたのかノリノリでやっていた春姫は重大なミスに気付く。扉を閉め忘れていたのだ。部屋の中は丸見えで、更にタイミング悪くダンジョンに誘いにきたアイズが立っていた。

「……お邪魔しました」

目を合わさず静かに扉を閉めるアイズ。春姫は暫くの間固まっていた。彼女が我に

返ったのは十分後。羞恥心が一気にこみ上げて来る中、服を着替えると装備品を身に付けてホームを飛び出してアイズ達に合流した。

「ダンジョンで御座いますね？　ええ、春姫もご一緒します。ちょうど何もしていませんでしたから！　ええ、本当に何も！」

「……うん。春姫は何もしてなかった」

強引に先程のことを無かった事にした春姫と、格下の彼女相手に言い表せない威圧感を感じて頷くアイズ。一緒にいたティオナ達は何がなんだか分からずに疑問符を浮かべるも春姫に笑顔を向けられるとそれ以上は何も聞けない。人間、追い詰められれば途轍もない力を発揮するらしい。

先程まで見てはいけない物を見たアイズの挙動不審さに何かを感じ取っていた一同も黙りダンジョンに潜るための買い出しが進むのだが、どうも擦れ違う女神達が春姫を見て何やら話をしてキャーキャー騒いでいる。恋バナだと察したティオネが思い出したのは怪物祭りの最中にあったというイシュタルとの一件。女神達の間ではモンスターの脱走よりも興味深いのか広まっており、ロキも知り合いに会う度にあれやこれや聞きたがられウンザリしていた。

「ねぇ春姫。例の温泉施設で進展があったんだって？　どのくらい進んだのか教えなさ

いよ」

ロキ・ファミリア随一の肉食係ティオネは逃がさないとばかりに春姫の首に腕を回して耳元で囁く。語るのは恥ずかしいのか赤くなりつつも誰かに話したいという気持ちもあったのか春姫は陶酔した顔で語り出す。ティオナは兎も角、アイズも興味深そうに耳を傾けていた。

「……イシュタル様より美しいと、春姫を愛していると言っていただきました。それだけでも至福だというのに……」

「ほらほら、最後まで話しなさい。幹部命令よ、幹部命令」

流石に此処から先は話すのは無理だと俯く春姫ではあるがティオネはそれを許さない。脇腹を擽って続きを話すように促せば春姫も恋の進展を自慢したいという気持ちがあったのだろう。照れと自慢が入り交じった顔でそっと右手を前に出して愛おしそうに視線を向ける。まるで今も繋がっている気分だった。

「……指を絡めて手を繋ぎ、膝枕もしていただきました。恋人になるとは本当に素晴らしい事なのですね」

まさにこの世の春とばかりに語る春姫。恋愛素人のアイズはそれだけで赤くなっているし、リヴェリアと共に魔法石の購入に向かっていなければレフィーヤも同様だっただろう。ただ、ティオナはよく分かっていない様子だ。

「ふーん。良かったね、春姫」
とりあえず本人が嬉しそうなのだから良いことなのだろうと素直に賛辞するし、春姫も語って聞いて欲しいというのが一番なので構わない。問題があるとすればティオネだ。正直言って不機嫌そのものだった。

「はー!? アンタ、マジで言ってる!? そこまで行って手を繋いで膝枕、それもして貰う方って……。もう二人ともひん剥いて閉じ込めるしかないわね」
「ひ、ひん剥くっ!? あ、あの、何かお気に障ることをしたでしょうか!?」
「殆ど何もしてないから呆れてんのよ、こっちは! あー、もどかしいっ!! 子供の恋愛か、アンタ達はっ!」
他人の恋愛にかまけるのは自分の恋が疎かになるフラグとも言えるが、常に全力投球暴走気味なティオネにとってヴァルツと春姫の恋は息抜きに丁度良い模様。只、イチャイチャしている癖に進展が遅いのはイライラする要因で、困惑する春姫や注目を集める通行人をよそに普段は被っている猫を脱ぎ捨て叫ぶティオネだが、本性は結構な人数が知っているので評判の低下はあまりない。寧ろ聞き耳を立てていた女神達からすれば同感だった。
この後、色々お節介を焼こうとする推進派と周囲から見守ろうとする傍観派の二つの

派閥が出来るが別の話である。

　場面は変わってダンジョン内。縦穴を使って下へ下へと中層を突破、巨蒼の滝などは一々正規の道を進むのは面倒だとばかりにオッタルがヴァルツを抱えてダイブ、目的地である三十階層にまで辿り着いた。食糧庫を順番に周り、ロキ・ファミリアの面々がダンジョンに入った時刻には食事を始めていたのだが……。

「……料理が上手くなる魔具？　お前が神フレイヤにでも振る舞うのか？」
　エプロン姿でキッチンに立つオッタルの姿を想像するヴァルツ。似合うような似合わないような微妙な姿が浮かぶがオッタルは首を静かに振って否定した。
「詳細は聞くな。出来るか出来ないかだけ言えば良い。金はちゃんと払う」
「ああ、出来るぞ。だが素材が……向こうから来た」
　指差した先には本能から二人に襲いかかろうとするブラッド・ザウルスの群れ。オッタルは立ち上がると静かに剣を構える。一匹たりとも逃がさない、鏖殺だ。気質の目ではない鋭い眼光を光らせて言外に告げると動き出す。格の差を感じ取ったモンスター達だが時既に遅し。全滅するまで一分も掛からなかった。

「……ドロップアイテムは無しか」
「確かボールスの店でも売っていた。……戻るか」
肩を落とすオッタルはヴァルツの言葉に静かに頷く。そのまま十八階層に向かう二人であった。

第十一話

「猛者、一つ確認したい。神フレイヤが神へスティアの眷属を気に入っている……間違い無いか？　弟が同派閥内で浮いていてな。主神は顔見知りなのでパーティを組むのを薦めようと思ったのだが」

「……止めておけ」

リヴィラの街が目前まで迫った頃、ヴァルツは少し悩んでいた事を相談してみた。ヘスティアがホームに居候中は駄目人間の見本みたいな自堕落さに天界に帰すべきだと思った程ではあるが追い出された後は屋台でのバイトを順調に続け、眷属とも良好な関係を結べている模様。ヴァルツからすれば見た目が同じだけで全く別の生き物である人間に恋心を抱いている事が理解出来ないが、怪物祭の一件の噂からも善人であると評価を下した。

なので仲間の居ない弟に同程度の強さの仲間を作って欲しかった彼からすれば良い人材なのだが、どうもフレイヤが目を付けている様子が伺える。神は時に人に理不尽な試練を与えるがフレイヤはその傾向が強い。弟が巻き込まれてはと心配して訊ねた結果は明言せずとも警告の類が返ってきた。

「そうか、ならば俺からは何もしない。……だが、奇縁悪縁の類でも彼奴自ら関わるのならそれは仕方ない。不興を買わない程度に忠告だけしておこう」

弟も一人前であるし何から何まで干渉するのも、とは思いつつ言外に弟を巻き込めば自分は介入する腹積もりであると述べる。オッタルもフレイヤの意志ならば試練を乗り越えろと口にはするが思うところがないわけでもなく無言で返す中、ヴァルツは真剣な表情を保ったまま口を開いた。

「所でだ。春姫の尻尾や耳をモフモフしてみたいのだが獣人的にどうなのだろうか？触られたら嫌な感じのする場所か？」

「……特に嫌悪を感じる場所ではないが身体の一部だ。恋人とはいえ同意は取れ」

真剣な顔で何を訊ねるのだと呆れながら当たり障りのない忠告を済ませたオッタルが街に足を踏み入れれば否が応でも注目が集まる。普段はあまり来ないオッタルでも今日の人の少なさは奇妙だと思いながら進めば見知った姿が目に入った。丁度ロキ・ファミリア一行がボールスと話をしている。

（終わるまで待つか）

特別仲が悪いわけではないが良好でもなく、敵対してぶつかる事もある派閥相手だ。街で暴れてフレイヤの名に泥を塗ってはと物陰に身を潜め、会話が終わって一行が去ってから目的のアイテムの商談に移ろうと待っていたがただ事ではない様子。どうも女が犯人の殺人があったらしく、Ｌｖ．４のハシャーナが被害者だった。荷物が荒らされており何かを探した痕跡があると、対して抵抗も出来ずに殺された彼よりものフィン達を疑い、女性陣の誰かが色仕掛けをしたのではと言い出したのだ。……但しティオナは除く。

「オッタル、今回の調査だが犯人が関係しているであろう物が理由だ」

「……そうか」

今回詳細こそ聞かされていないが、フレイヤが黒幕でない限りはオッタルでさえ対処できない可能性のある害が及ぶ、その様な事を聞かされては黙ってはいられない。ヴァルツの言葉を聞いて介入しようとしたオッタルだが憤慨した様子の春姫の声で足を止めた。

「ばばば、馬鹿なことを言わないで下さいませ！　私が肌を許すのはヴァルツ様のみ。あの方なら何処を見られても尻尾や耳を好きに触られても構いませんが、他の殿方などごめん被ります！」

「……だそうだ」

「ふむ。流石に大勢の前だと恥ずかしいな。……おい、ボールス。犯人が探している物に心当たりがある。俺が本人から受け取った」

純情であると同時に脳内ピンクの春姫はあらぬ疑いにとんでもない事を口走り、流石に止めようと姿を現したヴァルツの姿を見るなり瞬時に気絶、レフィーヤが慌てて受け止める。彼の登場で驚くフィン達だったが、背後から現れたオッタルの更なる登場にその驚きは上書きされた。

「んげっ！　猛者が何で此処にっ!?　……つーかヴァルツ。お前、噂になってんぞ。殺された奴と酒場で接触してたってな」

「実際に接触して荷物を受け取った。先程まで三十階層まで行っていたのだが……」

特にボールスが驚きつつも有名人故に目立っていた友人に話題を向ける。ギャラリーがザワザワとする中、まるで受け取ったその足で三十階層まで行っていたかのような発言と共に鞄を持ち上げた時、様子を眺めていた鎧姿で顔に包帯を巻いた男が飛び出して来た。速度は第一級冒険者の中でもトップに匹敵し、咄嗟の事に近くにいた誰も反応できない。

「こうも見事に引っ掛かるとはな。……余程大切な物だったか？」
「ぐっ!?」
　いや、唯一反応出来た者が一人だけ。都市最強の冒険者、猛者オッタル。襲撃者の速度はＬｖ．６にすら届くが彼はＬｖ．７。荷物に向かって伸ばされた腕を優々と掴み砕けそうな握力で逃がさないと握り締める。思わず声を漏らした男が発したのは女の声だった。
「女っ!?　だってその人はどう見たってっ!?」
　予想外の事態に思わず声が出るレフィーヤ。犯人は女だろうと警戒を向けてなかった者の中から出て来た第一級冒険者並みの速度の持ち主、更に包帯の隙間から見える男の顔。それが出した声が女だった事は彼女を混乱させるのには十分で、オッタルは僅かに眉を動かしただけで掴んだ腕を引き寄せ、振り払おうともがく男の顔を掴むと包帯ごと顔の皮膚をむしり取る。その下には女の顔が隠れていた。
　赤い髪の女。少なくてもこの場にいる誰も彼女を知らない。ハシャーナ程の冒険者を一方的に殺害した程の力にも関わらずだ。
「頭を潰したのはこの為だったのか。……ボールス、皆を避難させよう。巻き込まれれば只じゃ済まない」
　いち早く冷静になったフィンが親指の疼きを感じて警告を出すも混乱収まらぬ者達

は動けない。猛者が相手を掴んでいるというのもあってどこか安心していたのだろう。女はもがくも振り払えないと悟るやいなや空いた腕で捕まれた腕の肩口を掴み、自ら腕を引きちぎった。飛び散る血飛沫と一切の躊躇無く行われた行動にオッタルでさえも動きが止まり、女がヴァルツの鞄に手を伸ばし掴んで引き裂くのに充分な時間が生まれる。

「宝玉が無いっ!?」

「ああ、既に処分済みだ」

目的の物が入っていない、ブラフに引っ掛かった事で生まれた隙はオッタルの、都市最強の冒険者の前では余りに致命的。腕を伸ばしがら空きになった脇腹に豪腕が叩き込まれた。重厚な衝突音と同時にくの字に曲がって飛んでいく彼女は骨が砕け内臓が幾つかやられたのか血反吐を吐き散らかし岩盤に衝突。衝撃で砕けた岩の欠片が散らばった。

「……堅いな」

「君がそう言うなんて……ただ者じゃないね、彼女」

硬質な物を殴った事による痺れ、長らく感じていなかった感触に思わず呟いたオッタルの隣で槍を構えたフィンが見詰める先ではダメージこそ大きい様子だが立ち上がり戦意を失っていない女の姿。覚束無い足で立ち上がった彼女が指笛を吹き鳴らした瞬

間、リヴィラの街を包囲する程の食人花が現れた。
「……此処は退かせて貰う」
食人花の一体が彼女を頭に乗せて街の外まで退避を始め道を塞ぐように間に他が殺到する。まだ混迷する住民達に食人花が襲い掛かる中、風を纏ったアイズが飛び出した。
「逃がさない」

「……その風。　そうか、貴様がアリアか」
「っ!?」
女が呟いたアリアの名にアイズが動揺から固まり、その隙に女は街を囲む湖に飛び込んだ。水音が響いて食人花が迫ってもアイズは固まったままであり、食らいつこうとした一体の魔石をフィンが投擲した槍が貫き砕いた。
「アイズ、今は集中しろっ！　ボールス、三人一組で対処するように指示を。魔石は上顎の奥だっ！」

もう一本の槍を構えながら指示を出すフィンだが、彼の心中は穏やかでない。彼にとってアリアの名はそれ程までの物だった……。

第十二話

　正面から向かってくる三体の食人花に対してヴァルツは大剣に変えた大金剛を構えて横一文字に振り抜く。刀身二メートルに及ぶ刃は三体の上顎を纏めて斬り飛ばし、続いて向かって来た一体に突きを放てば長槍に変化した大金剛が魔石を砕くが背後からも食人花が迫っていた。
（体が軽いな。……これも春姫との愛の力か）
　互いへの愛の深さがステイタスの向上に関わるというスキルの効果を実戦で実感したヴァルツは槍を刀に変えて食人花の頭部を切り落とし、着地して周囲を見渡せば既に多くの食人花は討伐されていた。中で最も多くを倒したのは矢張りと言うべきかオッタルである。初見の相手を剣で滅多切りにして軽々としとめるだけでなく、危うい所だった他の冒険者を助ける余裕すら有る。そして最後にリヴェリアの特大の魔法が纏めて氷結させた所で勝負はついた。
　……赤い髪の女に逃げられた時点で完全なる敗北である。それは彼らも思っているのかロキ・ファミリアの顔も浮かない様子。特にアイズは未だに動揺を鎮められずにいた。

「あの人、どうしてあの名前を……」

静かに呟いた問い掛けに答えられる者は誰も居らず、怪我人の治療を終えたヴァルツ達は一旦地上に向かう。その日の夜……。

「春姫、本当に良いのか？　俺に気を使わずとも良い。いや、気を使って無理をしないで欲しいのだが……」

この日、自宅に戻っていたヴァルツの隣には春姫の姿があった。偶にしか帰らないので掃除が疎かになっているヴァルツの家の掃除の手伝いや手料理の差し入れを行う尽くすタイプの春姫だが、ヴァルツも競売で億単位の値が付く魔導書を渡したり、自作の装備を譲ったりと貢ぐタイプなので似たもの同士上手く行っているのかも知れない。尚、現在は弓を製作中だ。名前も効果も普通ではないのは決定である。

ソファーに並んで座りながら何処かそわそわした様子で膝の上に手を乗せていたのだが、その上に春姫の手が重ねられ、傾けた身体を預けられる。

「気など使っておりません。春姫はヴァルツ様に触れて欲しいのです。私を見て私に触れて私を愛して頂きたい。それが願いで御座います」

照れながらも目を合わせて告げる春姫は静かに一度だけ頷き、ヴァルツの手が恐る恐るながらも伸ばされて目的の場所に触れた。

「……あっ」

想像以上の感触に最初は遠慮がちだった動きが徐々に速くなると同時に春姫の口から艶やかな声が漏れて動きが止まるも先程同様に春姫の手が重ねられ続きを促す。ヴァルツも意を決したのか遠慮がなくなり始め、春姫は口元に手を当てて必死に声を押し殺そうとするも漏れていた。

「ふぁ……うっ、んっ……」

「しかし手触りが良いな。普段から手入れをしているのか？」

「は、はい！　ダンジョン以外では毎日……。あの、今の顔を見られるのは恥ずかしいので……」

春姫は遠慮がちにしながらもヴァルツの膝に頭を乗せて寝転がり両手で口元を抑える。余程声を聞かれたくないのだろうが、ヴァルツは恥ずかしいのなら声を聞かないようにすべきかとは思いつつも手の動きを抑えられない程に夢中になっていた。

「……お前の尻尾の毛並みは最高だな」
「ヴァルツ様が下さった櫛で手入れをしておりますので。……耳も触りますか？」
「是非っ！」
　春姫のフサフサの尻尾を堪能したヴァルツの言葉に尻尾が嬉しそうに揺れ、続いて耳に手が伸ばされれば此方も元気に動く。この日、ヴァルツは春姫の尻尾と耳の手触りに満足し、二人共ステイタス補正が更に向上した。

（……顔を見られたくないのなら膝枕でなく抱き締めて貰えば良かったでしょうか？）
　この日の晩、ベッドの中で後悔する春姫だが、絶対に恥ずかしさで気絶するから膝枕で正解だっただろう。だが、そんな事など知らぬとばかりに悶々とする春姫が眠ったのはこの一時間後。夢の内容は抱き締めて貰った後の展開であった。

「……純情エロ狐」

余談ではあるが春姫は寝言が多く、トイレに起きていた同部屋仲間は毎度のことに呆れてしまう。内容は察して欲しい。自室でも遠征中のテントの中でもこうなのだからロキ・ファミリアの中には既に行くところまで行っていると思っている者も居るが致し方ないのかも知れない。尚、最近まで筆頭はレフィーヤであった。

だが、この二人キスすらまだである！

「女神だけの秘密の会って何かと思ったら……」

ヘファイストス・ファミリアのホーム兼店舗ではヘスティアがバイト中である。ベルの為に億単位の借金を背負った彼女は屋台のバイトと掛け持ちして居るのだが、休憩時間にヘファイストスから聞かされた話題に少し呆れた様子だ。

内容はヴァルツと春姫の恋愛について。直接的な支援に出る推進派と見守る傍観派に分かれた上で双方とも会報を作って互いを牽制しつつ同士を増やしている。最も応援と言っても薬を渡そうか、誘惑して恋の試練を、など好き放題に書くだけで実際は誰もさほど行動に出ない。精々町中で出会ったらアドバイスをする程度。これには傍観

派にはロキやフレイヤが所属しているからとの噂がある。
「これだから暇を持て余した神ってのは。他にやること無いのかな？」
「ぐーたらし放題だったアンタにだけは言われたくないと思うわよ？　……私としては不安がない二人の事よりもこっちの方が興味を引かれるわね」
未だどちらにも所属していないヘスティアとヘファイストス、特にヴァルツの主神であるヘファイストスには両方から勧誘が来ているらしいがプライベートには口出ししないと拒んでいるのが現状だ。少し前の自分を棚に上げて他の女神の暇つぶしを非難する神友に呆れながら一枚のゴシップ記事を手に取る。少し前から噂になっている謎の鎧男についての記事であった。

「ああ、僕も知ってるよ。怪我を負った冒険者を助けたり遺品を持ち帰ったりする正体不明の連中だろ？　都市の近くの村を襲うモンスターを退治してちょっとした英雄扱いだそうじゃないか」
「……そう。装備で全身を隠して顔も体型も種族も分からない謎の連中。ギルドが彼らへの不要な詮索や干渉を控えるようにって言っているし、罪人を使ってるって噂よ。ウチも何人か助けられたらしいけど装備品の質がだいぶ上質だって話だったわ」
少しだけ気になったのでホームに居る椿以外の上級鍛冶師にそれとなく話を振って

みたが特にこれといった情報は無し。当然、ヴァルツもこう言っただけだ。

『謎の鎧の集団の装備について何か心当たりがないか？　いや、少なくても都市の人間にも都市外の人間にも噂に聞くような装備は作っていないな』

神は人の嘘を見抜ける。ヴァルツの話に嘘はないと判断したヘファイストスだが、矢張り店で売っている中でも上の方の品に匹敵するだろうと聞かされれば気になって仕方がなかった。

「ふーん。でもギルドにはあまり詮索するなって言われているんだろ？　じゃあ諦めたらどうだい？　おっと、そろそろ休憩が終わる。僕は持ち場に戻るよ。仕事を早く終わらせて愛しのベル君を出迎えてあげなきゃ！」

張り切って仕事に戻る友の背中を眺めながらヘファイストスは一つ思い付いた。ヴァルツと言えば弟のヴェルフがヘスティアの眷属であるベルと同様にソロでダンジョンに潜っていたな、と。今はベルがサポーターを雇っているが仲間が増えるのは悪いことじゃ無いだろうと。

「仕事終わりにでもヘスティアに提案してみようかしら？　……それにしても何か引っ

かかるのよね」

心の中のモヤモヤの正体が分からぬままヘファイストスは仕事に戻る。鍛冶場に入った途端に雑念は消え、仕事に没頭するヘファイストス。暫くの間、金属の音のみが響き渡った。

第十三話

　ダンジョン中層、早朝で霧が立ちこめるこの場所でアイズ・ティオナ・ティオネ・ベートはガレス相手に模擬戦を行っていた。
「てやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
「リル・ラファーガ！」
「せぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！」
「がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!」
　超重量超威力を誇るオーダーメイド武器大双刃（ウルガ）を使ったティオナの剛撃も、アイズの風を纏った突進も、ティオネの二刀による連撃も、ベートのファミリア随一の脚力による蹴りも止められる。本来、この連係攻撃ならばＬｖ．６であるガレスでも防ぎきるのは困難だろう。……そう、Ｌｖ．６であったなら。
「ふんっ！」
　オラリオでも最上位級である力を誇るガレスによる斧の振り払いで四人纏めて弾き飛ばされる。空で体制を整え着地するも四人には疲弊の色が見え、ガレスは未だ余裕が

見て取れる。そんな彼の体には光の粒が付着して輝いていた。これこそが圧倒の理由。一時的なランクアップを与える春姫の魔法『ウチデノコヅチ』によるものだ。

「お主達、少し力が入りすぎとるぞ」

拠点となるリヴィラの街が復興中の今、ダンジョン深部で稼ぐのは少々困難だと復興完了予定の明日まで鍛錬をすることになったのだが、宝玉について詳細を知らされた四人は少々気合いが入りすぎている傾向にあった。この様な時は倒れるまで暴れるのが一番だと言い出したガレスが相手になり、より上質の経験値を稼ぐ為と一時的にＬｖ．７になってＬｖ．５の四人を圧倒していた。

先程から気合いが空回りしている四人に呆れたような視線を向けるも気持ちは理解している。今後遠征を続けていれば出会うであろう穢れた精霊の分身。神に最も愛されている種族という規格外の敵を想定した結果焦りが生まれているのだ。ガレスも同じだ。未知を求める冒険者として武者震いがする反面、恐ろしくはないと言えば嘘になる。実を言うと相手を申し出たのもジッとしていられないからであった。

「だって大人しくしてられないよ、ガレス！　さ！　続き続き！　遠征前にランクアップを目指す位のつもりで張り切っちゃうからねー!!」

「……ふっ。それなら今の儂を倒すくらいせんとな！」

だが、その中でも変わらずに脳天気なティオナは迷いを感じさせない笑顔で構え、三人もつられて僅かに無駄な力が抜ける。ガレスも思わず笑みを浮かべるのだが、此処からと言った所で周囲を舞っていた光の粒が消え失せる。ウチデノコヅチの効果時間が過ぎたのだ。十一の頃から主な特訓を魔法の持続時間向上と精神力の増量に費やした結果、効果時間は三十分に迄延び、インターバルも五分程度まで短縮された。

「やれやれ仕方無いのぅ……」

水を差された結果になったガレスが遠くに目を向ければ余波に巻き込まれない距離で短刀の扱いの特訓中の春姫の姿が見える。攻撃魔法を覚えていない為、自衛の為に武器の扱いを学んでいる春姫はアルミラージの首を見事に撥ね飛ばしていた。持っているのは魔法剣士御用達、シリーズ『マジカル脳筋』の短刀。素材の関係で武器としての性能はそこそこの値段に見合った程度、第二等級に届かない程度だが、攻撃の際に魔力の数値が力に上乗せされる効果が有る。

尚、制作者が誰かは丸分かりだ。使用者の殆どが武器の名前を口にしない。っと言うよりも他の装備の使用者も愛用はしても付けられた名前は口にしない。理由は恥ずかしいからだ。

「それじゃあ続きと行くぞ！」

「当然！」
「うん」
「お願い……」
「当たり前だ、ジジイ！」
　魔法が解けたから一旦休憩……な訳もなく、武器を構えたガレスに四人も容赦なく向かっていく。インターバルの間は四人が数の力で押し、再び魔法が発動すればＬｖ．差が２になったガレスが圧倒する。こうして双方共に経験値を稼いでステイタスを向上させていくロキ・ファミリアの幹部達であった。

「て、てや！」
「踏み込みが甘い！　腕の力だけで振るな！」
「は、はい！」
　ガレス達の遠くで特訓する春姫の指導を行うリヴェリアはアルミラージを一刀両断する姿を観察する。まだＬｖ．２に昇格したての上にステイタスの成長も後衛向きな春姫だが、一見した所全体の平均がＦは有るように見られる。ロキから聞かされたスキルの影響だろうと思い当たった。
（……この前は手を繋いだと嬉しそうに語っていたが、それだけでこれか）

今後急上昇する事も下降する事も視野に入れ、情報を入手しなければと思いつつも団員の恋愛事情を調べる事に僅かに抵抗があるリヴェリア（独身・彼氏無し）であった。

「……そう言えば弟が居ると言っていたがバベルの入り口で見掛けた者だろうか？」

才能を無駄にし、誇りのために命を危険に晒す愚弟だとヴァルツがこぼしていたのを思い出す。その後で仕方ないから云々と誰に言っているのか言い訳をしながら世話を焼いているらしい発言もあったが、バベルの入り口で彼に似た男が仲間らしい少年と話をしていたのを思い出して彼が弟かと思い当たる。同時にもう一つの噂、同胞が過敏に反応しそうな内容だった物を思い出した。

ヴァルツの弟は一族から失われたクロッゾの魔剣を作る力を持っている、そんな噂だった。

「……この前の一件だがかえって良かったのかも知れないな。冒険者さえ居ればモンスターも恐れるに足らんと民衆は判断しただろう。脱走騒ぎで迅速な動きがなければ……死人が出ていた」

「犯人だろう女神は都市でも特に厄介な神の一柱だっけか？　目を付けられたら迷惑こ

の上ないって言ってた」
「眷属の前では言えないが……闇派閥と同じで巻き込まれる者からすればモンスターと何一つ変わらない。いや、眷属を増やせる分、神の方が面倒だな、正直」
「オレっちが言うのもアレだけど……お前、人間の中で浮いてねぇか？」
　そうなっていればモンスターへの恐怖が増していただろう、そう語るヴァルツに話し相手は微妙そうな顔になる。神をモンスターと同等呼ばわりなど地上の人間からすれば唖然物なのであるが、本人からすれば納得が行かなそうな顔だ。
「祖父母と両親と弟と友人……それと知人には大体言われているな。人では及ばない力を持つ人外の存在で害を成す存在……モンスターと何が違う？　特に侵略を続けるラキアのアレスなど被害者の数で言えば種族は兎も角関係する個体が出す被害数ならば上から数えた方が早いだろう？」
「……矢っ張りお前は変人だわ。……まあ、そんなだからオレっち達とも上手く行ってるんだろうけど」
「そうだネ、リド。ヴァルツが変人だったから受け入れて貰っていル」
「お前達、もう少しコミュ力を身に付けろ。……ほら、出来たぞ。悪いな、角を隠すとなれば兜が不自然な形になる。飾りだと言い張るのも無理が生じるしな」
　ヴァルツが向かい合って話をしているのは人ではない。リザードマンにセイレーン、

モンスターであった。その瞳にモンスター特有の凶暴さも敵意もなく理性が見て取れる。神からしても理外の存在ではあるがヴァルツは平然として武器の整備を続け、角が根元から切り落とされたフォモールに武器を手渡した。素材からして彼の角が元であろう手斧、但し特殊な力は付与されていない。ちょっと工夫して普通の装備にしていた。

『クシャミを我慢し続ける感じだな』

とは本人の談。因みに恋人である春姫も彼を変人だと呼んでいる。その上で好きだと言っているがネーミングセンスの悪さと変人である事は否定しないでいた。そんな彼が整備しているのは最近噂になっている正体不明の者達の装備品。尻尾を体に巻き付けて腹部が太いズングリとしたその鎧を装備して行動しているリザードマンのリドは都市の外での事を思い出す。

『ありがとう！』

『助かった！』

都市の外の村で凶暴なモンスターを退治して村民達を守ったのだが、その際にお礼を

言われ今手に持っている果物もお礼として貰った物だ。……太陽は眩しくて綺麗だった。正体を知らないとはいえお礼を言われ人と触れあうのは楽しかった。今使っているオーダーメイドの装備がなければ夢で終わっていた、そんな物だ。

思い出す。武器を奪おうとして初めて出会った時の事を……。

『なんだ、その手入れの雑な武器は。貸せ』

『え？　いや……』

『貸せ』

余りの剣幕に持っていた装備を渡してしまい、手入れを任せてしまった。その途中で気付いたのだ。此奴、喋った自分に驚いてなかった、なと。

『ん？　ああ、喋っているな』

『それだけかよ!?　他のモンスターと違ってて不気味とか有るだろ!?』

『神だって見た目が同じだが人とは全く別の存在だろう？　同じだ同じ』

（あっ、此奴矢っ張り変人だわ）

リドは心の底からそう思った。

閑話　弟のちょっと微妙な一日

「帰れ！　俺は魔剣は作らねぇ!!」

この日もヴェルフは魔剣制作の依頼をしに来た冒険者を邪険に追い返す。所有者を置いて勝手に砕け散る、そんな魔剣が嫌いな彼の元に魔剣を求める客が殺到するのは何とも皮肉な話だ。

鉄の声を聞け、鉄の響きに耳を貸せ、鎚に想いを乗せろ。それが鍛冶師の師である祖父や父から教わった言葉だ。だが、ヴェルフに魔剣を作り出すスキルを、兄であるヴァルツが魔具を作り出す能力を開花させた際に目の色を変えた周囲に流されだした二人を見たある日、ヴァルツは家を出た。今思えば一緒に来るかと誘われた時に素直について行けば良かったと思う。

昔大病を患って恩恵を得るのが遅れなければもっと早く出ていただろう、とも思った。改宗可能になった日に神を脅して国を去った兄なら絶対にすると確信している。

「ったく、何奴も此奴も……」

良い意味でも悪い意味でも有名な兄と、自分の事を吹聴して回る椿。二人の影響で彼の噂は広まった。海すら焼き払ったと伝わるクロッゾの魔剣。ヴェルフにとって、それ

は使い手を堕落させる物でしかない。

『権威や金に目が眩んで誇りを捨て去る。そんな者から教わった誇りにどれだけの価値がある？　そんな物で自らの道を狭めるから何時までも未熟なんだ、お前は』

兄はそんな風に割り切っているがヴェルフは違う。彼にとって大切な物だ。その言葉を鍛冶師の誇りとして心に刻み込んで腕を磨いて来た。だから魔剣を打たない彼だが周囲は魔剣を打つように言い、拒むヴェルフはファミリアでも孤立。今ではダンジョンに共に潜るのはヴァルツ位しか居なかった。

何だかんだ憎まれ口を叩きながら素材集めに付き合ってくれ、この前も勝手にゴライアス討伐の取り分を無くしたからと言って中層の素材を全部渡して来た。先程完成したミノタウロスの角を使った短剣『牛短（ぎゅうたん）』もその素材を使った物。今まで自力やなけなしの金を使って集めた物を使った物等よりも上質な武具が作れたと思う。

「……見てろよ、兄貴。借りは絶対返すし鍛冶師として絶対に越えてやる」

中層で採れた鉱石を使った太刀を鞘にしまいながら呟き、ヴェルフは工房を後にした……。

「あっ！　変人の弟だ！　モンスターの死骸を喜んで解剖してたんでしょ？」
「え？　弟が変人じゃなかったっけ？　この前も興味深いって笑いながらダイダロス通りを走ってたって聞くよ？」
「僕、色々な薬を買い込んで実験してるって聞いた事がある」
「そっか。あの人、変人なんだね」
　街を歩けば指さしてくる子供達。これも新たな鍛冶の技法の参考になればと何でも手を出すヴァルツの行動が原因だが何時の間にか自分まで変人呼ばわり。無邪気な声を聞きながら思う。何時か絶対殴ってやる、と……。

「……ヴェルフ、ちゃんとお風呂入ってる？」
　ヘファイストス・ファミリアの店舗に向かって新人鍛冶師の作品を置く場所に向かい、相変わらず自分の作った物が売れていないのに溜め息が出てしまう。取り敢えず新しく作った武器をヘファイストスに見せに行ったのだが開口一番に眉をしかめられる。思い出してみれば数日は風呂に入らず工房に籠もっていた。
　灼熱の炎と向き合って鎚を振るい玉の様な汗を流す。自分では感覚が麻痺していたのか気付かなかったが、思い起こしてみれば擦れ違う人が変態呼ばわり以外にヒソヒソ

何かを言われていた気がする。ダンジョンに籠もって戦っている冒険者も汗と土と血の匂いで途轍もないが、鍛冶師の汗臭さも酷い物だ。正直鼻が曲がりそうである。客商売の店舗ではＮＧである。スメハラ、ダメ、ゼッタイ！

「三ヶ月位前、アンタの兄貴も汗臭い状態でやって来て、これから春姫っていう例の恋人に会うって言ってたのよ。兄弟揃って本当に……」

「マジか、あの馬鹿。あり得ねぇだろ……」

「ええ、椿に頼んで風呂屋に叩き込んで貰ったわ。丁度来ていたロキ・ファミリアの幹部も手伝ってくれたしね」

その光景を頭に浮かべて額に手を当てるヴェルフ。ヘファイストスも思い出したのか同じ様なポーズを取る。本当にあの馬鹿は、と同時に思うのであった。

「因みに本人は、春姫は別に平気で御座います。何度も工房にお邪魔して嗅ぎ慣れていますし……汗の臭いすら好きで……ハワッ!?　だ、そうよ」

「……え？　その頃、まだ恋人じゃ無かったんじゃ？」

尚、春姫の真似をするヘファイストスがちょっと可愛いと思ったのは秘密である。

「取り敢えず風呂に入らなねぇとな。第一印象が台無しだ」

ヘファイストスと分かれた後、時計を見れば約束の時間……一緒にダンジョンに潜る予定の相手との顔合わせの約束まで余裕がある。余りに仲間が見つからないからと気を揉んだヴァルツが知り合いの神の眷属で同じソロのＬｖ．１と組ませてみてはと提案、ヘファイストスがヘスティアに話を持ちかけて組むことになった。

流石に今の状態では不味いと自分で服の臭いを嗅いで汗臭さを自覚しながら風呂屋へと向かう前に着替えを取りに戻る。そして風呂で汗を流したのだが、約束の場所に向かう途中で女神達に取り囲まれてしまった。

「君、ヴァルツ・クロッゾの弟だよね？」

「うんうん、似てる似てる！　間違いないって！」

一瞬、魔剣の依頼かと思ったが様子が違う。好奇心に目を輝かせ、本人の返事も待たずにキャーキャー騒いでいる。兄がまた何かやらかしたのかと訝しむヴェルフに女神達は小瓶をダース単位で手渡してきた。他には大人のデートスポットの特集をした雑誌や大人があれやこれやを楽しむための道具等々、袋に入っているから良いが、知り合いに持っている姿を見られたくない物ばかり。

「え、いや、一体これは……」

「じゃあ、お兄さんに渡しておいて！　それと応援してるって伝えてね？」
　困惑するヴェルフを置いてマイペースに去っていく姿は女神であると思うヴェルフ。街中でこの様な物を渡されても困るばかりであった。

「……さっさと兄貴に渡してくるか。此処から近いのは自宅だが居てくれよ？」
　子供が目にしたら駄目なので適当な場所にも捨てられず、処分を誰かに頼むのも抵抗がある。この様な物を持っている所を誰かに見られるのは絶対に嫌だと思ったヴェルフは速攻で兄に押しつけようと心に誓うのであった。

「……まさか弟にこの様な物を渡されるとはな」
「俺が用意したんじゃねぇよ！」
　ダース単位の小瓶……精力剤を手にして微妙そうな顔を向ける兄に当然の抗議の声を向けるヴェルフ。この日は朝から何となくついていない一日であった。

尚、この後で向かったベルとの顔合わせは上手く行ったので翌日早速ダンジョンに向かう事になる。翌日、その姿を入り口付近でリヴェリアが、バベルの上からフレイヤが見掛けていた……。

第十四話

「へー！　ヴェルフって十七階層まで行ったことがあるんだ」

主神同士の関係もあってか同じ様にダンジョンに潜る仲間が居ないからとパーティを組んだヴェルフとベル。手土産代わりと渡された短刀の牛短でキラーアントを解体して魔石を取り出す作業の中、ふと話題に上がった到達階層の話にヴェルフは少々気まずそうだ。

「……あー、いや、兄貴のサポーターとして同行させて貰っただけだからな。俺でも対処できる数やモンスター以外は全部倒して貰ってたし……」

「優しいお兄さんなんだね」

「憎まれ口が多い上に変人だけどな。……風評被害が来るのが悩みだ」

純粋なベルにキラキラとした瞳を向けられても、自分からすれば兄の優しさに甘えさせて貰っただけだと思っているので気恥ずかしい。別に本職のサポーターを卑下する訳ではないが自分に実力でもない事を感心されても自慢には思えなかった。

そうこうしている内に魔石は採取し終わり幾つかのドロップアイテムを入手した二人は次の獲物を目指してダンジョンを進む。この日は初めてのパーティと言うことも

あって無理はせずに倒せる範囲のモンスターだけを狩っていたのだが、互いにソロで潜るよりも遙かに多くの魔石やドロップアイテムを集める事が出来た。
「矢っ張り仲間が居ると違うな、ベル」
「うん！　じゃあ、明日も頑張ろうね！」
「おう！　明日はもうちっと奥まで進むとして……サポーターも欲しい所だよな」
　モンスターが何時わき出てくるか分からない中での魔石の採取やアイテムや状況にあった武器の取り出し等、自分達だけでやるには精神的にも効率的にも悪い。サポーターの経験があるヴェルフや担当アドバイザーからサポーターについて学んでいるベルからすれば多少儲けが減っても必要な人材だと感じていた。
「でもフリーのサポーターって居るのかな？　大抵同じファミリアの人と組んでるんじゃない？」
「だよな。ギルドにでも聞いてみるか？」
　取り敢えず保留として本日は解散となった二人。換金後にベルは冒険者に襲われていた小人族の少女を助け、ヴェルフは晩飯を外で食べようとして街中を歩いている途中で店の中から呼び掛けられた。
「おい、ヴェルフ。お前の分も出してやるから入って来い」

声の主はダンジョン内で話題に出たヴァルツ。別に自分で出すから良いと思ったのだが呼びかけに反応して入ってしまったから仕方ないと向かっていく。兄が座るテーブル席には極東の服装をした見慣れぬ者達まで座っていた。

彼らはタケミカヅチ・ファミリア。春姫とは同郷で古い顔なじみの者達だ。以前春姫が相談を持ちかけた命の他にも千草という少女や桜花という青年も所属しており、他の団員も含めてタケミカヅチに育てられた孤児であり、出稼ぎとしてオラリオに来ていた。

「へぇ。兄貴に極東の武術を見せてるのか。参考になりそうなら何でも食いつくからな、此奴。迷惑かけてねぇか？」

「いやいや、春姫が世話になっているし、こうして偶に飯を奢って貰っているからな。俺達としては大変助かっている。それはそうとヴァルツよ。春姫との祝言は何時の予定だ？　その際は俺も手伝うぞ。まあ、極東の式なら兎も角、他の形式はよく分からぬがな」

折角なのでと同席することになったヴェルフだが、既に幾つかの皿が空になって酒も大分入っているのかタケミカヅチの顔は真っ赤で陽気に話をしている。その隣に座る命はヴェルフが来て数分後には酔いつぶれてテーブルに突っ伏し、桜花の隣に座った千

草は祝言という単語を聞いた途端に彼の顔をチラチラと見ていた。
仕送りもしなければならない弱小ファミリアには満足に酒を飲む余裕など当然無く、主神でさえアルバイトをする毎日。そんな彼らにとって極東の武術を今後の鍛冶の参考にしたいという理由からの申し出は渡りに船だったらしく、最初の数回は遠慮していても最近では金銭的余裕の差に愕然としながらも奢りを受け入れていた。
「……ああ、凶狼にも言われたな。さっさと結婚しちまえとか何とか……」
「ロキ・ファミリアのベート・ローガがかっ!? 噂とは大分違うんだな……」
傍若無人で弱者を見下す発言が多く態度も悪いベートの悪評は届いているのかヴェルフやタケミカヅチ・ファミリアの者達も想像と違ってその様な話をしてくる事に驚きを隠せない。実際は乱暴な言い方であり、その際にはこの様な会話があった……。

『おい、あの狐人の雑魚はテメェの女だろ。さっさと結婚でも何でもして冒険者なんざ辞めさせちまえ。魔法は認めてやるが他はてんで駄目で目障りなんだよ。贅沢させてやれる程度は稼いでるんだろが、ボケ』
『成る程。春姫と俺の心配をし、嫁いできたら楽をさせてやれという事だな? 前から思っていたがお前は優しいな。自分が嫌われても弱者が強くなれるように、心を折って

でも危険から遠ざかるように、そうやって悪態を吐き損を引き受ける』
『勝手な妄想してんじゃねぇよ。頭沸いてんのか』
『大丈夫。お前の今までを無碍にするから誰にも言わない。しかし、お前も大変だな。この前もその様な感じで剣姫に言い寄ってフられたのだろう？　もう少しコミュ力を身に付けた方が良いな』
『ぶっ殺す！　ってか、テメェにだけは言われたくねぇよ!!』

「まあ、奴への印象はそうだろうな。それで構わんさ」
　口に出し広まればベートが憎まれ役を背負ってきた意味が無くなると詳しい会話を話すのを避けるヴァルツ。その為に噂など当てにならずベートが少しお節介な所がある程度の認識しか与えずにこの話題は完了した。
　尚、ヴァルツがベートの意図を見抜いた理由だが、弟に対して同じツンデレ（但しバレバレ）だからである。同じツンデレでもベートは年期も格も違うのだが、ツンデレ故にツンデレの意図を汲むことが出来ていた。

「そうそう。ミアハには何時か礼をせねばならんな。何時もポーションを貰ってばかり

で……彼奴、借金が有るが大丈夫なのか？」

話は移り変わり、一本五百ヴァリス程のポーションを無償提供するミアハの話題となった。新米の一日の稼ぎが二千前後なので宣伝費としても少々お高い。少なくとも多額の借金を持つ貧乏ファミリアがする事ではないのだが。唯一の団員であるナァーザはミアハが泣くまで殴るのを止めなくても良いくらいだが、ミアハ目当てに来た女性のお客を追い返しているのだから同罪でもある。彼女もまた主神に恋する乙女であった。

「神は人とは違う。借金も何時か返済し終われば良い程度の認識なのだろう。……人とは何もかもが違うな、矢張り」

怪物趣味という蔑称が存在する。ラミアやハーピーの様に女性に近い姿のモンスターに欲情する者への最大限の侮蔑であるのだが、この話題を進めると神に恋する人も結局は同じなのでは、と、ヴァルツは思えて仕方がなかった。どちらも人に似ているが思考も根本も人とは違いすぎる。ヒューマンやアマゾネス以外の種族は同種族同士でしか子をなせず、それでも恋に落ちる者達に対しては其処まで思わないが神に恋する人の気持ちだけは理解できなかった。

「……それが俺が変人と呼ばれる由縁かも知れないな」

ヴァルツ自身、自分が普通の思考ではない自覚は存在する。だからと言って周囲に合

わせる気は毛頭無いのだが。ビールを呑みながらの呟きは誰の耳にも届かず喧騒にかき消された。

それと変人と呼ばれるのは奇行による物が多いがそこは自覚がないらしい。今後も弟を巻き込んで変人の名を広める事だろう。

「……おい、ヴェルフ。今後は魔剣を準備しておけ」

酒場からの帰り道、ほろ酔い気分で月を眺めながら歩いていたヴェルフはヘファイストスや椿から何度も言われうんざりしている言葉に気分を台無しにされる。舌打ちと共に兄を睨むが眉一つ動かさずジッと見つめて来るだけであった。

「客は選んで構わん。だが、我を貫きたいなら腕をもっと磨け。冒険者としても鍛冶師としてもだ。腐るような相手には渡さなくても良いが、勝手に折れるのが嫌ならば絶対に壊れない魔剣を目指す程度の気概は持て、未熟者。……己の意地で危険に晒して良いのは自身の命だけだ。仲間と組むなら覚えておけ」

「……うっせぇ」

言葉一つで変わるような相手ではないと分かっていたのか背中を向けて呟くだけの

ヴェルフにそれ以上何も言わずにヴァルツは去っていく。月明かりの下、ヴェルフは暫く拳を握りしめて立ち竦んでいた。

その翌日の事である。明日から何日もダンジョンに潜るので顔を見に来たと合い鍵を使ってヴァルツの家に入ってきた春姫だが、服装は何時もの物とは違って露出があまりにも多い。ティオネから贈られたアマゾネスの衣装を着て、更に勇気を出して膝枕をさせていた。

「……大丈夫か？　顔が真っ赤だぞ」

「こここ、この位はさせて下さい！　い、何時も私ばかり何かをして貰ってばかりで……」

「お前が恋人というだけで何より誇らしい。側に居るだけで何よりも幸せだ。……俺が貰いすぎている位だ」

緊張した顔から少し落ち込んだ表情に変わった春姫の頬に手を当てて静かな声で告げるヴァルツ。その手に春姫の手が優しく添えられ……。

「あ、あの！　春姫の初めてをお捧げしましゅ！」

噛んだ。

一方その頃、朝からダンジョンに潜るヴェルフだが、少々上の空。ともに戦うベルは彼を心配し、サポーターとして同行する少女は二人に獲物を狙うような目を向けていた……。

第十五話

「……それでどうなったの？」

ダンジョン内での休憩中、春姫の惚気話を聞かされたティオネはさほど期待していないという顔で訊ねる。初めてを捧げる、その言葉だけで純情なレフィーヤなどは茹で蛸みたいになっているのだが今までの事が事なのでティオネは期待していない。少し離れた場所で話が耳に入ったリヴェリアも何かを予想していた。

「ヴァルツ様は只一言、分かった、とだけ仰り……私の初めてをお受け取りになりました。少し痛かったですが至福の思い出で御座います……」

だが、当の本人は指で口元を隠しながらうっとりとした表情で語り、頬を赤く染めてそっと顔を逸らす。その仕草に色気を感じ取ったティオネは彼女に先を越されたという驚愕の事態に思わず口をあんぐり開けて固まってしまう。散々フィンにアピールしている自分が進展せず、鎖骨を見ただけで羞恥から気絶して淫夢を見る純情エロ娘の春姫が純潔を散らしたというのだから仕方がないのだろう。

「……また夢ではないのか？」

どうやらその際の姿を妄想してしまったらしいレフィーヤが熱病にかかった様な事態に陥る中、リヴェリアは極めて冷静にそう呟くのであった。

「ヴァルツ、えらく機嫌が良いじゃない。春姫ちゃんにプロポーズでもしたの？　派閥の問題、交際は兎も角それは早いわよ？」

一方、ヴァルツが持って来た商品の魔剣をチェックしていたヘファイストスは何時も何を考えているのやらと考えが読めない表情をしているヴァルツが珍しく上機嫌なのを見て少し驚いた様子だ。また変な物でも作ったのかと他に持参した弓や鎌に視線を向けるのだが、どうやら違った様子だ。

「……実は春姫のファーストキスを貰ってな。歯がぶつかって少しびっくりしたが最高の気分だ」

「ふんふん。それでそれで？　……それだけ？」

「いや？　クロッゾの名は面倒だから将来的に俺が婿入りするのが良いと伝えたが……どうして呆れている？」

数年前から誰が見ても恋人同士だった二人が漸く正式に交際を始めたと思えばキス

だけで明らかに浮かれきった様子。これにはヘファイストスも肩透かしを喰らった気分だ。にも関わらず結婚後のことはちゃんと考えているというのでなんとコメントして良いのか分からない、今の心境はそんな感じであった。

「まあ、節度を持つのは大切として……腕を上げたわね」

更に進んだ関係を望んでいるのが見て取れる春姫に同情しつつも主神として忌憚なき評価を下す。ヴェルフと違って伝説に残るような規模の威力の魔剣を打つスキルを所有していないが、今回持ってきた魔剣は一般的な物とは格が違う。恐らく同等の物を打てるのはヴェルフを除けば自分と椿位のものだというのがヘファイストスの判断だ。

齢二十にしてこの領域の魔剣を作り出す才と鍛錬は口にする目標が実を伴わない誇大妄想ではないと知らしめるに充分。

（本当に叶えるかも知れないわね……）

神の領域の者すら高く見上げる領域を登り続けるという大口を実現するかも知れない鍛冶師の作品を見て刺激されたのか無性に鎚が持ちたくなったヘファイストス。この時ばかりは主神としての書類業務が煩わしくなった。

「あっ、それと武器だが銘は『当たりが出たらもう一個』と『鎌ってちゃん』だ」

「……そう」

ネーミングについては何も言うまいとする。実際に売れているし性能は良いのだから仕方ないとするしかなかった。例え九割以上が付けられた銘で呼ばなくともネーミングセンスにはコメントしないヘファイストス、主神の鏡だろう。多分言っても無駄だろうし、それでも無性に言いたい気分では有ったが……。

あの椿でさえ追求しないネーミングセンスはどうして此処まで行き着いたのか全知全能の箸の神でさえ分からない地上の未知の一つであった。

「ギキィイイイイイ!!」

キラーアントというモンスターが存在する。上層部に出る蟻型のモンスターで、金属並に硬質な甲殻だけでなく重傷を負えば仲間を呼ぶという厄介な性質を持つので甲殻の隙間に刃を差し込んで素早くしとめるのが推奨される。例えステイタスが上でも圧倒的な数の暴力によって覆されるのだから。

「やべっ！　逃げるぞっ!!」

ヴェルフも何度もキラーアントは倒してきたし、仲間を呼ばれたらどれ程厄介なのかヴァルツが敢えて呼ばせて教えてきた事もある。だが、この日の彼は他事に思考を割かれ何時もなら見逃さない瀕死のキラーアントを放置してしまった。響き渡る耳障りな鳴き声と奥の通路から響くキラーアントの群れが蠢く音。何処かで大量発生『怪物の宴（モンスターパーティー）』でも起きたのか床や壁、天井を覆い尽くす程の圧倒的な数が濁流の如く迫ってくる。

（畜生っ！　何やってんだ、俺はっ！）

あの濁流に捕まれば飲み込まれ成す統べなく殺されると一斉に逃げ出す三人。先頭は現在の所最も敏捷が高いヴェルフで、立ち塞がる他のモンスターを斬り伏せていく中、懐に忍ばせたナイフ程度の大きさの魔剣に意識が向く。今朝、郵便受けに入っていた物で誰が作って誰が入れたか分かっていた。これを使えばどうにかなる、そう分かっていても使用を躊躇う中、背後から悲鳴が聞こえた

「きゃっ！」

「リリッ！」

今回、自ら売り込んできたから雇ったサポーターのリリルカ・アーデが転倒したのだ。ベルはそれを見逃せず引き返して彼女を助けに向かう。キラーアントの群れは直ぐ其処まで迫り二人の命運が尽きるまで後少しと悟った瞬間、ヴェルフは魔剣を構えて走り

出していた。

「伏せてろっ!!　白砕鬼鞭(はくさいきむち)いいいいいいいいいいいっ!!」

真上から振り下ろした瞬間、魔剣の先端から無数の白い鞭を思わせる冷気が発せられる。意志を持つかの様にしなってキラーアントに叩き付け、触れた瞬間に内部まで凍らせて打ち砕く。吐く息が白くなる程に周囲の気温が下がり壁に霜が付着する中、百や二百を優に越えていたキラーアントの群れは魔石を砕かれて大量の灰となり、幾つかのドロップアイテムだけが残されていた。

「す、凄いね、ヴェルフ!　それがリリが言ってたクロッゾの魔剣なの!?」

「流石です、ヴェルフ様!　リリは感激してしまいました。伝説に違わぬ威力ですね!」

「……いや、作ったのは兄貴だが、これはクロッゾの魔剣とは別モンだ……」

口々に感想を言ってくる二人の声を聞きながらヴェルフは握り締めた魔剣をジッと見つめる。スキルによって失われたクロッゾの魔剣を作る力を得た彼だからこそ手の中のこれは別物だと、兄が己の力で行き着いた領域の品だと理解させられる。

「……マジで何やってんだよ、俺は」

二人に聞こえない大きさでヴェルフは呟く。悔しさと無力感で魔剣を握る手が震えていた……。

第十六話

「回復系の『邪狩虎（じゃがりこ）・血射治（ちいず）』に束縛系の『負網金（ふあみごん）』。……神々もビックリのネーミングだよね、この魔剣」

「言うな。性能と売り上げは良いんだ……」

ベルの為にヘファイストスに武器を打って貰った対価として多額のローンを背負ったヘスティアはヘファイストス・ファミリアの店舗で働いているのだが棚に並べられたヴァルツ作の魔剣の銘を見て何とも言えない気分に陥ってしまう。彼女にそれ以上は禁句だと店員の男性が告げるが彼も彼で微妙な気分だ。本来は魔法の劣化でしかない魔剣だがヘファイストス・ファミリアのそれは性能も値段も高く、スキルの恩恵で残存魔力量が色の変化で分かる彼の魔剣は罅が入って崩壊間近を知らせる他の魔剣よりも売れている。

「職人の世界じゃ腕の良い奴が偉い。商人の世界じゃ売れる物が偉い。……名前は兎も角な」

効果も魔法を凌駕するとされるクロッゾの魔剣には劣るが単文詠唱レベルにまで達しており、淡い光で周囲の者を回復したり金の鎖で相手を束縛したり等、他の魔剣に比

べて特異な性能も求められる理由だ。……但し高価だ。ベートが所持している通常の魔剣が百万ヴァリスだが、彼がわざわざ選ぶ程の性能の魔剣の更に数倍の値段で販売されているので上級ファミリアにしか手が出せなかった。

「そっか。職人のファミリアでお店だもんね。……ネーミングセンスは別として」

「ああ、職人が経営する店だからな。……ネーミングセンスは別だが」

付けられた銘も突飛なものではない筈だが、ヘスティアも店舗の責任者も何故か微妙な気分で棚に視線を送る。特にヘスティアなどは神会で付けられる痛い二つ名に匹敵するセンスに脱帽だ。数の優位とファミリアの力の差をバックに弱小派閥に洗礼を行う神々のノリで付けられた二つ名は地上の人間達には素晴らしく感じるが、同系統のヴァルツのネーミングは受け入れられない。

それは直感と呼ばれる物が理由だ。神の悪意と遊び心に溢れた痛々しい名を賞賛する人の子が本当にヤバい、そう思える何かがヴァルツの付ける名には存在した。

「本当に地上には未知が沢山だよ……」

ヘスティアはどうしてだろうと悩みつつもベルが将来的に彼の作品を購入したとしてノリノリでアレな名前の物を使わなくて済むのだとも安堵する。兎に角、ヴァルツのネーミングセンスは彼とヴェルフ以外には受け入れられないレベルであった。

「おっと、お客さんだ。いらっしゃいませー。……あっ」

「か、神様っ!?」
　そんなベルだが今まさに来店してきた。それも女連れだ。因みに担当アドバイザーのエイナなのだがそんな事など知らないヘスティアからすれば先ほど心配したばかりの眷属が知らない女とデートしているという驚愕の展開で、ベルも最近稼げるようになったのに主神が新しいバイトをしているのだから当然驚く。
「一体どうしたんんですか!?」
「どうしたもこうしたもあるかっ！　ベル君の浮気ものぉおおおおおっ！」
「ええっ!?」
　ヘスティアが涙目で叫んでベルが更に困惑する。店員の男性が止めるまで場が混迷を極める中、椿の工房をヴェルフが訪ねていた。打たないと決めた筈の魔剣を持参し、主神や兄以外の相手に見せている彼の心境が複雑なのは顔を見れば一目瞭然。苦虫を噛み潰した様な顔で魔剣への評価を待っていた。
「……ふむ。何かあったかは知らんが漸く忠告を受け入れる気になったか。主神殿や兄に見せに行かない所は未だに意地を張っているが……ふぅむ」
　椿の手の中の魔剣は伝説に残るに相応しい力を秘めている。団長である彼女の打つ魔剣すら凌駕する出来のそれをマジマジと見つめて唸り……無造作に放り投げた。カ

ラカラと机の上で音を立てる魔剣を見たヴェルフは自分が作った物を乱雑に扱われた事で立ち上がろうとし、歯噛みして座り続ける。

「……スキルの恩恵で魔剣の性能としては一級品だが、鍛冶師の作品としては未熟だ。ヴェル吉、それはお前が一番分かっているだろう？　今まで魔剣を否定し腕を鈍らせてきた。だから今も立てなかったのだ。……違うか？」

椿の問い掛けにヴェルフは返答しないが握り締めた拳が肯定を示す。一夜で作った物であることを加味しても目の前の魔剣は満足できる質ではない。例えスキルの恩恵で高い性能を持っていても鍛冶師としての誇りが許せなかった。だからこそ椿が言ったように立てない。目の前の魔剣を誰よりも否定して来たのは自分自身なのだから。

「……これからは魔剣を打つ。だがっ！　俺は俺の為にしか打たねぇ！」

「別に構わんだろう。鍛冶師にも客を選ぶ権利はある。お前の兄も一定以上の質の物はオーダーメイド限定であるしな。盆暗に気に入った物を渡すなど鍛冶師なら誰も好まん。……ほれ、乱暴に扱って悪かった」

立ち上がり叫んだヴェルフを座ったまま見上げる椿は静かに言い放ち、机の上の魔剣を差し出す。それを引ったくる様に受け取ったヴェルフは入り口に向かって走り出し、ドアノブに手を掛けた所で歩みを止めると椿に背を向けたまま再び叫んだ。

「……絶対だ。絶対にお前もヘファイストス様も兄貴も越えてやるっ！　こんな挫折位で俺の心は折れも冷めもしねぇんだよっ!!」

乱暴に扉を閉めてドタドタと走り去っていくヴェルフ。きっと今から工房に籠もって一から魔剣制作の修行に取り掛かるのだろう。彼の足音が聞こえなくなった後で椿は肩を竦めて溜め息を吐いた。

「やれやれ。賭けはヴァルツの勝ちか。来た時の様子から数日は掛かると思ったのに、奴の予想通り一日目で覚悟を決めるとは。……兄弟の絆という奴か？」

取り敢えず腕を更に上げて何時までも追いつけないヴェルフをからかってやろう、そう決めた椿は鎚の音を工房に響かせた。

「結婚を機にクロッゾの名を捨てる？　ええ、それが良いかと。王族が一応のケジメを

付けたとは言え未だ敵視するエルフはオラリオだけでもって大勢居るでしょうから」

豊穣の女主人の中庭にてリューとヴァルツは言葉を交わし、同時に剣を交わす。先日の約定によって十人中十人がヴァルツに原因があると言うであろうとは言え、勘違いから攻撃を仕掛けた詫びにこうして手合わせを行っている二人。正面から鍔迫り合い、二人同時に相手の木刀を弾くなり後ろに跳ぶ。

勝負はステイタスの差と、何よりも技術の差でリューが優勢。矢張りスキルで上乗せされた技術を本職でないヴァルツが使うのと実戦で身に馴染ませた技術を本職だったリューが使うのとでは大いに違う。

「……ああ、それは俺も思っている。王族の顔を立てて大っぴらに敵対はされないがな」

クロッゾの魔剣が戦争で使われた際にはエルフの住処である森も焼かれ、未だにクロッゾの一族を憎んでいるエルフは多い。数年前に両者合意の下でリヴェリアが王族としてケジメを付けるという形で思いっ切り殴った事は既に広まっているが、それでも敵意が消えたわけでは無いのだ。

「だからまあ、将来的に春姫との間に生まれる子には重荷を背負わしたくない。鍛冶師か冒険者か、それ以外を選ぶかは別としてな。……所で刀の調子はどうだ？」

「ええ、素晴らしい出来映えです。……妙な音さえ鳴らなければもっと良いのですが」

微妙な顔をしたリューが見つめるのは壁に立て掛けてあるヴァルツから贈られた刀。

木刀を使っていた彼女の希望で刃を潰しているこの魔具は、強い方が良い経験になると渡された物だ。能力は二つあり、一個目は魔法に対する打撃。水流であろうと火であろうと一つの固まりとして殴り飛ばせる。……もう一つは音だ。打撃の度にある音が鳴るのである。

「ああ、確かにピコピコ鳴るのは少し間抜けだな。だが、名は良いだろう？　その『ピコピコ反魔（はんま）ー』」

「……ノーコメントで」

高潔なエルフの誇りが善意で渡された物への否定を許さない。性能も優れているので使わない選択肢も存在しない。ただ、名前だけが無性に嫌だった。

「……所で妙な噂が。ラキアがクロッゾの嫁を捜しているとか」
「母が亡くなって久しいが、男やもめに気を使った王の計らい……な訳はないか。面倒事の臭いがするな」

第十七話

波で揺れる客船のデッキに出た春姫は手摺りに手を掛けて夜景を眺めていた。この日は純白のドレスを身に纏い、軽く化粧をして髪と同じ金色の髪飾りを身に付けている。

「……綺麗で御座いますね」

もう日も暮れた時間が来ているが町の灯りは宝石の様に輝き、遠目に見える歓楽街の娼館のネオンは眩い。見慣れたはずの街の景色が宝石箱のようだと思いながら何かを期待するように隣に立つヴァルツに視線を送る。彼も普段着ではなくタキシードに蝶ネクタイと着飾っており、彼を見知ったものが見れば気が触れたのかと疑うだろう。そんな彼は春姫と同様に手摺りに体重を預け、彼女に視線を向けないまま所在なさそうに呟いた。

「お前の方が綺麗だ……程度の陳腐な言葉しか浮かばん。俺がもう少し気が利く男なら……」

内心ではもっと相応しい言葉があると想いながらも形にできない不甲斐なさに沈んだ彼は自虐的な言葉を吐くも、春姫が身を預けて寄りかかった事で中断させられる。驚

いて視線を向ければ月明かりに照らされて輝く金の髪と美貌、普段は貞淑に隠している胸の谷間が間近に迫っていて思わず視線を知らした彼の顔は紅潮していた。

「気など利かせなくとも春姫はヴァルツ様のお言葉であれば嬉しいのです。ふふふ、でも今日は照れたお顔を見る事が出来て少し得した気分ですね」

「……あまりからかってくれるな」

「嫌で御座います。私も偶には悪女の振る舞いをしてみたいので……でも、唇を塞がれればこれ以上は何も言えませんよ?」

クスクスと笑う春姫には普段は見られない余裕が存在していた。本来ならば先程の言葉だけで照れてしまって顔を赤らめる彼女に身を寄り添う余裕が生まれたのは先日漸く口付けを交わしたから……ではなく先程飲んだお酒の力だろう。酔いが醒めれば一気に羞恥心を刺激される彼女だが今は気にする事もなくグイグイと迫っている。

言外にキスを強請り目を閉じて唇を軽く突き出す。ヴァルツは一瞬照れから迷いながらも彼女の方に軽く手を置いて唇を重ねた。時間にして数秒程度の軽いキスであったが酔いの力を得た春姫でさえもヴァルツの顔を真正面から見れない有り様だ。

「人の恋路を眺めるもんじゃねぇな……」

物陰から兄の恋愛を眺めていたヴェルフは船内に戻るには二人の前を通らないといけず大いに困る。軽く潮風に当たる程度のつもりだったのに酷い災難だと嘆くのであった。

ヴェルフに何故この様な不幸が降りかかったのか、それは今朝まで遡る……。

「船上パーティーの招待状？　何でまた貴方に……いえ、思い出してみればオラリオでも有数の鍛冶師でしたね」

豊穣の女主人の中庭での稽古中、昨夜訪ねてきた者から渡されたという封書について聞かされたリューはヴァルツが一応それなりの地位であることを思い出した。ステイタス補正の能力として毒の耐性を付加するなどは他にあるがヴァルツが作る魔具と称される装備品は格が違う。世間ずれした発言が多いので忘れていたが……。

「前に一度暇潰しに同じ主催者のパーティーに出掛けたのだが大勢の愛人を見せつける

様に紹介された上に明らかなハニートラップを仕掛けられてな。……エルドラド・リゾートのオーナーのテリーとかいうドワーフだ」

「……」

その男の噂をリューは何度も耳にしている。オラリオには神々に嘱望されて多くの娯楽施設が存在し、その中のカジノ街は他国が強い影響力を持って一種の治外法権とまでなっている。その中で最大規模のカジノのオーナーがテリーであり、出回っているのは強権的で強欲な悪評だ。だが、それにしてもリューの表情は険しかった。

「それでどうなさるおつもりで？　別にお金に困るわけでもなく、カジノ街との繋がりも不要でしょう？　ならば出来るだけ関わらない方が良い」

「まあ、そうなんだが神ガネーシャに頼まれていてな。ギルドの指令でカジノの警備などに団員を出向させているが怪しいから探るのを手伝って欲しいそうだ。まあ、愚弟に栄養を付けさせる良い機会だと思うし、ついでに探るだけ探ろう。取り敢えず護衛に裏で名が知れている二人が居るとは招待状を持ってきた男から聞き出したぞ。Ｌｖ．３で黒拳と黒猫……どうした？」

「……いえ、少し。それでわざわざ私に相談するという事は……何かあるのですか？」

「ああ、本題がある。それに入る前に導入として必要かと思ってな」

その二つ名に聞き覚えがあるのかリューは一瞬驚いた顔をするもヴァルツの問い掛

けには首を振って誤魔化し、真摯な瞳で本題に入れと告げる。内容次第では未だ忠誠と信仰を向ける女神の為にも荒事に身を投じる気であったが、物陰から話を聞いていたシルは少々心配そうだ。

「そのハニートラップを仕掛けてきた女性は猫人だったのだが、彼女もこの店の店員の二人の猫人も語尾に猫の鳴き声を付けるだろう？　男は付けないし、他の獣人は男女共に普通の話し方なのだが……エルフが部族によっては認めた相手以外の接触を避けるのと同じ様な訳なのだろうか？　デリケートな問題であるなら本人に訊ねるのも問題だしな」

「……それだけですか？」

　見せられた招待状には数人の同行者も許可されると記されており、この流れならば変装しての同行を頼まれると判断したリュー。今の自分に対する葛藤や正義を貫くための覚悟、店主で鬼のように怖いミアにどうやって話を通すかの思案。それら全ては一瞬

で無駄になった。
　状況が飲み込めず聞き返す彼女にヴァルツも疑問符を浮かべた顔で返答する。先程まで漲っていた力がドッと抜ける瞬間で思わず木刀を取り落としてしまった。
「それだけだが……他に何か有るか？」
「やっぱり貴方は風変わりだ……。因みに私も知りません」

「それで私について来て欲しいのですか？」
「他にも有力者が招待されているようだし同じ様な手で俺を抱き込もうとする者も含まれるからな。ああ、誤解してくれるな。お前以外の女に目移りはしない。美神よりも美しいからな、春姫は」
「ええ、疑ってなどおりませぬ。……それとも春姫の信じる心をお疑いですか？」
　一人残ると言いだしたアイズと、それに付き合ったリヴェリアを残して帰還した春姫は身なりを整えるなりヴァルツの家にやって来た。渡されている合い鍵を使うまでもなく既にヴァルツは家に居て出迎え、今は春姫が遊びに来た時にくつろげるようにと改

築した極東風の部屋に敷いた畳の上で三人顔を付き合わせて船上パーティーについて話をしていた。

そう、三人だ。この場にはヴェルフの姿もあった。当然、先程から同じ光景を見せつけられている。

「……あのなあ、何が悲しくて兄貴とその恋人のイチャイチャを見せられなきゃならねぇんだよ」

「イチャイチャ？　普段通りだが？」

「え？　そう見えましたか？」

「もう結婚しちまえ！」

その叫びは二人の姿を見せつけられる者の九割が同意する内容であったとか無かったとか……。

そして時間は進み豪華客船で行われる船上パーティーに参加したヴェルフだが、その場で出会った男とヴァルツが顔を合わせた瞬間に険悪なムードを醸し出す。不倶戴天の敵だと周囲の誰もが悟る刺々しい雰囲気だ。

「クソ鍛冶師か。嫌な奴と顔を合わせたモンだぜ。ったく！」

「それには同意だな。此方も会いたくない相手と出会って気分が最悪だ」

彼の名はアレン・フローメル。フレイヤ・ファミリアのＬｖ．６の冒険者で二つ名は『女神の戦車（ヴァナ・フレイア）』。以前鍛冶師を見下す発言をした為にヴァルツが絶対に何も作らない相手と定めた内の一人であった。

「……ああ、クソ。こんな所で喧嘩するなっての。おい、兄貴を止めて……」

「はひ？」

止める手伝いを求めて横を見れば給仕から渡された酒一杯で酔った様子の春姫。本日も貧乏くじはヴェルフであった。

第十八話

「初めまして、マクシミリアン殿。私が『エルドラド・リゾート』オーナーのテリー・セルバンティスで御座います」

「……初めまして。それと申し訳有りませんが握手はご勘弁いただきたい」

友人……いえ、知人であるヴァルツさんに覚悟や葛藤を至極どうでも良い質問で台無しにされた私ではあったが、男装して船上パーティーに同行していた。今はラキアの占領下に置かれた国の貴族でヴァルツさんの友人であるアリュート・マクシミリアンであり、今回探りに来たテリーと軽く言葉を交わしつつ相手の瞳を見る。

春姫さんには好色な瞳を、私とヴェルフさんには関係を利用してヴァルツさんを抱き込まんとする道具を見る意志が含まれていた。……この男を見た時、予想は確信に変わる。思い出すのは私が正義と名乗れていた頃の事。敬愛する女神の慈悲は無駄であったとこみ上げてくる怒りを隠して宴の席に向かいました。

「彼女達は皆、私の移り気な愛を受け入れてくれた大切な存在です。この美貌を独り占めしては愛や美を司る女神様達の怒りを買いますのでお披露目している訳でして……」

新しく入ったという獣人の女性の腰に手を回しながら語るテリーの横で彼女は、いえ、所有物の証のつもりなのかチョーカーを付けている彼女達は笑みを浮かべてはいるが表面的だ。恐らくは何らかの手段で従わされているのでしょう。見るに耐えませんが今の私は下手に動けない。

「……せめて殴りつける大義名分さえあれば」

テリーは娯楽都市からの出向してきた大物……という事になっている。背中を晒し解錠薬を使えば全てを白日に晒せますが、ただ叫んでも無駄。私自身も死んだことになっているとはいえ賞金首だ。正体が露見すれば危険が及ぶ人が多い以上は手を出す口実を作り、その上で表舞台に立つ誰かにテリーの正体を暴いて貰えば良いだろう。事が順調に進めば何故解錠薬を使ったのかという疑問は有耶無耶に出来る。

警備に駆り出されているガネーシャ・ファミリアの団員に視線を送りつつ顔の上半分を覆う真っ赤な薔薇が刻まれた白い仮面に手を当てる。ヴァルツさんの魔具で装着者を男性であると誤認させる効果がある。酷い火傷を隠すためと伝えている他、顔見知りでも男を見て私だと思わない為に正体の露見を防ぐには向いていた。

……グレード・ザ・マスクマンGという名前はどうかと思いますが便利であることに

は変わらない。私は遠目に食事を楽しむヴァルツさんを眺めながら少し前のことを思い出していた……。

「買取？　ああ、構わないから品を出してくれ」

偶に私はダンジョンに潜ることもあるが流石にギルドにドロップアイテムの買い取りを頼むのは不可能だ。そして最大派閥の一つであるロキ・ファミリアでさえ交渉次第では買い叩かれるのだから私なら尚更。別にお金に困っている訳でもないが（ミア母さんに途轍もない負債こそ有れど）、時に大金が必要なケースもあるので適正価格での買い取りが望ましい。

この日、ミア母さんから聞かされた私はため込んでいたドロップアイテムを携えて彼の工房を訪れていた。エルフとしてクロッゾの名に思うところがない訳でもなく、変人との噂は既にあったので抵抗はあったが背に腹は代えられないとしたのですが提示された金額は予想より上でした。

「……何かの間違いでは？　この金額を貰う理由がない」

店でよく見かける下心を込めて気を引くためのチップを渡してくる酔客と同じだと

思った私は余分な分は返却しようと思いました。お金が多いに越した事はありませんが私は他の皆のように上手くあしらえる自信はない。ならば変な期待をされる前にと思ったのですが、彼の興味は既に渡した素材に移って私を見向きもしていません。

「何か勘違いをしているが俺はお前よりも素材の質の目利きは得意と思っているし、それが外れたなら自己責任だ。少なくとも俺の中ではそれだけの価値がある」

「……そうですか。あらぬ疑いをかけて申し訳有りません」

これが職人かと偏見を持って接した事を恥じる。真剣な瞳で素材を手に構想を始め何やらブツブツと呟きだした今の彼は既に私を認識してさえいないのでしょう。それでも礼儀として頭を下げて帰りだした頃、彼への評価は噂に聞く変人ではなく生粋の職人へと変わっていました。

「さて、今度は無理にでも魔石を食わせて強化種にした個体と通常の個体の死骸を持ち帰って解剖して……」

ええ、帰る直前に生粋の職人兼変人へと再び変わりましたけど。この後も私は彼の元

に素材を売りに通い、今は朝の稽古に付き合って頂く仲になったのです。

「ったく、参ったな……」

私が宴の席を離れて壁に背中を預けていると先程まで女性に囲まれていたヴェルフさんが同じ様に宴の席を離れて此方にやって来ました。彼は彼で兄の影響か名が知れており、魔剣を求めてか籠絡するように仕向けられた様子の女性達が寄って来た事に辟易した様子。

私にも何人か向かって来た上に目に熱がこもっている気がしたのは気のせいでしょう。いくら男と認識されるとはいえ、その様な事がある訳がありません。想い人が居るなどと適当にあしらって去って頂きましたけど少し疲れた気分です。

「丁度良い。少しお聞きしたい事が……」

想い人で思い出しましたが、彼とパーティーを組んでいるのは私の親友シルの想い人。最近雇ったというソーマ・ファミリアのサポーターについて訊ねれば彼は怪訝そうな顔になる。何やら色々ありそうですね。

「……どうもベルの奴が金を奪おうとしていた奴から助けたって言う小人族と似てたみたいなんだよ。それに冒険者に不信感を抱いてるみたいっーか。……いや、兄貴とソー

マ・ファミリアの団員が揉めた事があるから変に感じるのかも知れないけどよ」
「ああ、そういえば一年前に……」
　ソーマ・ファミリアの団員の内、Ｌｖ．１の冒険者は金銭に関わるトラブルに多く関わっている。換金所での査定額への文句など異様に金に執着しているのですが、ヴァルツさんの工房に盗みに入ろうとして会いに来た猛者に取り押さえられたという事件があったのを思い出しました。あの一件の後、関わった団員は追放されてファミリアも厳重注意を受けたらしいですが……。
「どうもこなさなくても罰則が無いノルマが有るみたいだけど……臭いよな？」
「ええ、怪しいですね」
　ペナルティーを恐れての結果なら稼ぎの悪い下級冒険者が焦る理由になりますが、ノルマ達成が不可でも何も無いのなら何故？　という疑問が湧きだしてくる。ミア母さんなら何か知っているかも知れませんね……。

「それで貴方はどうする気ですか？　私としては縁を切ることをお勧めしますが」
「いや、ベルの奴は信じてるし、何か理由があるなら助けようとするお人好しだからな。俺も仲間だし付き合うだけだ。……ちょいと風に当たって来る」
「……貴方も充分お人好しですよ」

呆れて良いのか感心して良いのか……いえ、これは呆れる所なのでしょうが本人達が見捨てる気がないのなら私は何も言うべきではないのでしょう。ヴェルフさんも甘いと思っているという表情でしたし、これ以上は野暮です。ついつい溜め息を吐いてしまった時、ポーカー等のギャンブルが出来るテーブル周辺で、ざわ…ざわ…とどよめきが起きる。

「あれは……」

負けているのは『女神の戦車（ヴァナ・フレイア）』アレン。どうも机の上のチップからして連敗続きで不機嫌そうな表情。確かアーニャのお兄さんでしたがギャンブルでスるのも似ているのでしょうか？　それにしても彼ほどの冒険者に真っ向から勝って平気そうな顔をしているのは……まさかの春姫さんでした。

第十九話

ヴァルツさんによると始まりは些細な口論だった様です。慣れないダンスに手間取っている彼をアレンさんが馬鹿にして、猫舌だの、変人だの、仲の悪さからか語彙力の低い低レベルな罵り合いに発展。最後の理性なのか殴り合いにはならなかったのですが周囲はハラハラしながら見守ります。

……都市でも有数の冒険者と鍛冶師が何をやっているのでしょうか？　幾人か神の姿も見えますし、明日には噂が尾鰭付きで広まって流石に主神の小言を食らうでしょうね。

「も、もう我慢できません！　私とアレで勝負です！」

「はっ！　だったら俺が勝ったら糞鍛冶師が謝りやがれ。テメェが勝ったら糞鍛冶師に何でも言うことを聞いて貰ったら良いじゃねぇか」

「その勝負乗りました！」

最後に事態をややこしくしたのが春姫さん。酔っ払って理性が明後日の方向にすっ飛んでアレンさんにポーカーの勝負を挑んだそうです。彼も挑まれたからには逃げるわけにも行かず受けたのですが、自分が負けたときのペナルティーを回避した条件を飲

ませる辺り、彼の方が一枚上手のようですね。

「……所で結構な額のチップの様ですが春姫さんにそんなお金があるのですか？」

「俺が出したが？　恋人だし俺のために怒ってくれたのだから、遊興費位は負担する。ああ、それにしても惚れ直すとは何度も起きるのだな。いや、正確には会う度にだ」

証文を書いて互いに五百万ヴァリスを初期の手持ちにしたそうです。遊興費という額ではない気がするのは気のせいではない筈。この人、子供を必要以上に甘やかしそうな気がします。

それはそうと流れるようにのろけるのは止めて欲しい。いえ、エルフが基本潔癖なのを無視してもこれはない。見れば周囲の人も似たり寄ったりの反応で、私と同じ事を言いたいのでしょう。

「……早く結婚すれば如何ですか？」

さて、言いたいことは言いましたし、金銭感覚がどうなっているのかと問いただしたくなりますが、今回は勝っているので止めておきましょう。視線を送れば結構な額をベットした春姫さんに対してアレンさんは残ったチップの全額を賭ける大勝負に出た所です。あの表情、かなりの手札が来たと見えて周囲がざわ…ざわ…とどよめき始めました。

「はっ！　どうした、降りるなら今の内だぜ？　糞鍛冶師の女の雑魚狐」
元々このポーカーはヴァルツさんを侮辱されたことで春姫さんが怒って始まった物。此処での更なる侮辱を行うことで一気に逆転を狙っているのでしょう。それだけ自信がある手札という事であり、春姫さんは冷静になって勝負を下りる必要が……。
「……受けましょう」
「駄目だ、春姫さ……」
その静かな声にアレンさんは笑みを浮かべ、ヴァルツさんは冷静に見守る。会場のボルテージが一気に上昇する中、私は制止しようとした言葉を止める。彼女も勝利を確信した目をしていた。
「……驚いたか？　春姫は酔っぱらうと大胆になるが、勝負勘と度胸が急上昇して凄腕の賭博師にもなる。別に賭事が好きになるわけではないので対して心配もない」
ヴァルツさんは負ければ嫌う相手に頭を下げるというのに臆した様子もなく春姫さんを信じている。ですが、相手が出したカードは……。
「ストレートだ。俺の勝ちは決まったな」
此処に来て構成難度の高い役を完成させるなんて天運としか言えません。これがＬｖ．６の冒険者まで上り詰めた男の力なのでしょうか……。私もハッタリや相手の表情を読む力などポーカーに自信が有ったつもりですが……。

「ロイヤルストレートフラッシュで御座います」
「んなっ!?」
上には上が居るという事ですね。少なくてもこの場では幸運の女神は春姫さんの味方だったらしく、アレンさんは驚いて口を開けた後、面白くなさそうに立ち上がってテーブルを後にします。第一級冒険者の不機嫌な姿にギャラリーは左右に分かれて道を開き、恐怖からか歓声すら上げる様子が有りません。そして私の横を通り過ぎる時、不機嫌を隠さずに小声でこう囁かれました。
「くだらねぇお節介で周りに心配かけるな、雑魚が」
……豊穣の女主人の誰かが話したのでしょうか？　あの人は時々姿を見せますし、アーニャが頼んでくれたのかも知れません。
「……周囲が心配、ですか」
巻き込まれることではなく、私自身への心配だと理解しているので殊更心が痛む。では、一刻も早く奴の化けの皮を剥がすとしましょう。周りに極力心配をかけない方法で……。

「ヴァルツ様、少し酔い過ぎた様なので春姫を運んでくださいませ」
「……仕方ないな。少し夜風に当たりに行こう。それと水を飲め、水を」
甘えるように両手を伸ばす春姫さんを躊躇無くお姫様抱っこして運んでいくヴァルツさん。確か春姫さんは酔いが醒めても全部覚えているそうですし、少し同情するので爆発して下さい。……私がそんな事を考えているとテリーが部下に何やら指示を出しています。
「フレイヤ様にご用意した例の部屋があっただろう。ご案内して差し上げろ」
だいぶ酔っているからか、それとも二人が恋人だからこの後で致す為の場所を用意するつもりか、どちらかかは知りませんがヴァルツさん達に客室を用意する様子。ですが親しげにしている者達と同時に浮かべた下卑た笑みが気になった私は様子を伺うことにしました。……そして聞き耳を立てていた人がもう一人。

「流石は神フレイヤに用意した部屋だけあるな。一流ホテルの様だ」

酔っ払った春姫を休ませる為と通された部屋は豪奢な作りだった。一流の調度品に窓から見える夜景。巨大なベッドにシャワールーム、ドレスルームには客人に貸し出している高価な衣装や装飾品。壁一面の巨大な鏡が気になったが、着替えた姿を見る為だろう。

「……普通の鏡ではないな」

何やら違和感を感じていた時、背後から袖を引かれる。振り返ると春姫が抱きついてきた。俺の胸に頭を預け背に手を回してギュッと抱き締める。押し付けられた胸の感触は……俺の胸の内に留めておこう。まあ、神ロキが頻繁に触りたがる気持ちが分からなくもない。寧ろ俺も触りたい。……頼めば可能な気もするが酔ってるのを良いことに頼むのは抵抗があった。

柔らかい、とだけ言っておこう。

「ヴァルツ様、私達は恋人……で宜しいのですね？」

「ああ、お前は美神より美しく愛しい……俺の恋人だ。鍛冶師としての名誉よりも誇らしいと思っている」

俺も春姫の腰に手を回して抱き締める。驚いた声を出されるが力が強かった訳でもないのか嬉しそうだ。ああ、本当に俺は幸せ者だな。此奴と出会った事が今までの人生で一番の幸福だろう。

「あの……春姫はポーカーで勝ちました。ご褒美を頂きたいです」

ほんのり赤くなった頬に潤んだ上目遣いの瞳。甘えるような声で何を期待されているか言葉にせずとも分かる。さて、どうすべきか？　俺にだって興味はあるが……。

「据え膳食わぬは男の恥、そんな言葉が御座います。私は愛しいお方に恥をかかせたくはありません……」

第二十話

ベッドの中、ドレス姿で俺の上に寝ころぶ春姫は緊張した面持ちで首に手を回して抱きついている。顔を見るのも無理なのか逸らすも愛くるしい照れ顔ははっきり見え、押し殺そうとするも声が漏れ出る。

「んっ……。あっ、あぁ……」

右手は長い金髪を指先で掬った後で頭に向かわせる。絹のような手触りが指先を通るのが心地よく、思わず何度か繰り返してしまった。このままこれだけをとも思ったが、続きを期待する目を向けられては応えない訳にはいかないだろう。

「……俺としては我慢せずに声を聞かせて欲しい。今の姿も魅力的ではあるが、違うお前も見てみたいぞ」

「意地悪で御座います……」

笑いながら告げれば少し拗ねたのかポカポカ胸を殴られたがステイタス差や本気でない事もあって痛くない。これでステイタスが逆だった場合は尻に敷かれるのだなと思うが、別に構わないだろう。十発ほど俺を殴った彼女は俺の蝶ネクタイを外し胸元のボタンを一個一個外した後で胸元に顔を押し付ける。

「ヴァルツ様の香り……」

そういえば以前、俺の家に来た時に洗濯の手伝いをしてくれたのだが、来客の対応で席を外して戻ってみれば俺のシャツの匂いを嗅いでいたな。見られたくないと思ってスルーしたが匂いフェチなのか？　獣人特有のサガかも知れないし、女性に聞くのは問題だから猛者に訊ねてみよう。

億体もない事を考えながら左手は腰の更に下に向かい、直接手で握って感触を楽しんだ後は何度も往復させながらさする。こそばゆいのか俺の手が動く度に春姫は身じろぎをして艶っぽい声を必死に押し殺していた。……此処まで来ると是非とも声が聞きたくなるが……。

「……そろそろだな。少し惜しい気もするが……」

呟けば予感が当たって春姫の意識が途絶える。幾ら酔って大胆になっても根本は変わらず純情で、保った方だが限界が来たのだ。俺の胸を枕にスヤスヤ眠る春姫の尻尾を撫でていた左手を離し、そっと頬を撫でる。スベスベツヤツヤの手触りが伝わってきた。

本人にも求められ俺も満更でもないが流石に酔って大胆になったのに付け込むのは気が引ける。尻尾も体の一部であるし勘弁して貰うとしよう。どのみち気絶している

事だしな。

……いや、最初の時に一気に進めば更に先に進めただろう。少しだけ春姫の胸元に視線を向け、ドレスを脱がした彼女に覆い被さったり、俺の上で照れながらも腰を動かす姿や後ろから……下世話な妄想はこの辺りで止めるとして、気になっていた事を調べよう。

「……」

掛け布団を完全にはねのけ、正面の鏡をアナライズで調べる。結果が頭に流れ込んだ瞬間、俺は枕元の蝶ネクタイを握り締め振り抜く。大金剛は蝶ネクタイからモーニングスターに形を変えて鏡を破壊した。粉々に砕け激しい音を立てる鏡の裏には呆然として固まっているテリーと身なりの良い者達、その護衛らしき男達の姿があった。大金剛を引き戻し鉄球をキャッチした俺は彼らに近寄り粉々に砕けた鏡の破片を手にする。反対側はガラスになっていて向こうが見え、ガラス側のみの防音機能まで付いていた。

「説明を……する必要はないな」

単純な話だ。この部屋は神フレイヤの為に準備したと聞いているが着替えを覗く予定だったのだろう。それが招待状を手にやって来たのが代理のアレンだったので俺と春姫をターゲットにして情事を覗く事にした、それだけだ。言い訳など出来ない状況で奴らが固まっていると廊下にいたらしい護衛達が慌てた様子で入ってきた。

「オーナー！」
「何事ですかっ！」
「む、むう。それがだな……あの女を捕らえろっ!!」
絶体絶命の状況で禄な判断が出来なくなったのか春姫に指先を向けるテリー。護衛達は戸惑いながらも春姫に近寄ろうとするが、武器を持ったＬｖ．４に勝てるはずもない。分かっているのか及び腰な所を悪いが刃を潰した剣を叩き込んで片付けさせて貰う。
「後二人……いや、俺が手を出す必要もないか」
他の入り口から春姫に手を出されないように気を張りながら残った二人の護衛……それなりの使い手らしい男達を見るが俺が倒す必要もない。既に向こう側の入り口に彼女が立っていた。
「見張っていたら好機が来たので来てみれば……殴り飛ばす口実が出来ましたね」
「お、お前はマクシリミアン!?　お、おい！　あの男を人質に……」
特殊な構造の鏡を見て状況を悟った彼女に対し、既に詰んでいると理解していないのか、人質にしろ、そう言い切る前に護衛の男二人……黒猫と黒拳を名乗っていた彼らは壁に激突する。俺や彼女が動くよりも早く怒り心頭の奴が死なない程度に殴り飛ばした。

「おい、クソ共。来なくて失敗したとはいえお前達程度の視線であの方を穢そうとは良い度胸だな。……ぶっ殺す」

……アレンの静かな声に残った男達は震え上がる。身を守る術を失った事で陥った状況を完全に悟ったからだ。都市の二大派閥を完全に敵に回した上で怒りで我を忘れそうな第一級冒険者に襲われそうなのだからな。

「……これは予定以上に骨が折れそうですね。さて、友人の情事を覗こうとしたのですので私も殴りたいのですが……流石に殺さないで貰えますか？」

「あぁ？　殴るなら勝手に殴れ、ゴミが。死んでなきゃ別に良いんだろ、別に」

護衛を倒すよりもアレンがやりすぎないように止める、そんな想定以上の難度に辟易しながらも彼女は手加減無しにテリーの顔面を殴る。歯が何本も折れて鼻血が出ていた。……しかし、俺を友人と思っていたのか。うん、素直に嬉しいな。これで後少しで友人の数が二桁に到達する。

「……しかし全部押し付けて良かったのでしょうか？」
「俺達だけでは止められないから警備のガネーシャ・ファミリアにも手伝って貰った事だしな」
　あの後、アレンに事後処理を任せた事を悩む彼女の事情を知っている象神の杖（ラクーシャ）がテリーの背中のステイタスを調べ、派遣されてきた男ではなく過去に悪事を働いていたテッドという別人がなりすましていたと判明。今は治療中の為に取り調べは難しいがアレンに受けたダメージが回復すれば全容が明らかになるだろう。
　まだ目覚めない春姫を背負った俺は豊穣の女主人の前で一旦分かれる事になった。ヴェルフは何やら気疲れしたと寝に帰ったが何かあったのか？
「では、グレート・ザ・マスクマンGが必要な時は言ってくれ。友人だし何時でも貸そう、リオン」
「ええ、あの仮面は実に都合が良い。またお借りします」
　友人ではあるが他の友人も名字で呼んでいるので俺も名字で呼べば握手を求めるように手を差し出される。認められたと、そう言う事だろう。俺は軽く手を握り返すと彼女と別れてロキ・ファミリアのホームに向かっていった。

……しかし最後まで仮面としか呼ばなかったのはどうしてだろうか？　名前が覚えられなかったのか？

「……二十四階層でモンスターの大量発生か。恐らく例の宝玉が絡んでいるな。奴を調査に向かわせるとして、Ｌｖ．６相当だという女も気になる。仲間も居るだろうな」
「じゃあ、事情を知っている者達から調査隊を出そう。第一級冒険者を中心に、都市に居るかも知れない協力者に気付かれない為に少数精鋭のメンバーで。……猛者は外せないがフレイヤがどう出るかが問題だ」

第二十一話

「……お前が居るとは驚きだな。ああ、それと一応謝罪しておこう。アレンと口論になったからな。場を弁えず互いのファミリアの品位を下げる行為だった」

テリーが実は成りすました別人であったと発覚し、後始末をギルドが引き受けてから数日経ったある日、俺は十八階層の酒場に来ていた。酒を飲むためではなく、極秘の任務の協力者と合流する為だ。

二十四階層でのモンスターの異常発生は少し前から耳にしていたが例の胎児が発見された三十階層でも起きていたらしく何らかの関連があると見た神ウラノスの指示で調査に向かうのだ。何分公に出来ない内容なのでロキ・ファミリアの面々は予想していたが、まさか猛者まで参加するとは思っていなかった。

「気にするな、アレンにも非がある。……フレイヤ様の指示があった。少し鬱陶しい、とな」

あの女神が猛者を動かすという事は胎児に関わる連中が居ては邪魔なのだろう。それが何かだが、どうも浮かない顔をしているのを見る限りでは女神はヴェルフとパーティーを組んでいるという少年への試練に予想外の事態が加わるのは避けたいのだろ

うが、此奴は眷属としては兎も角、個人として何も知らない相手を危険に晒すのに複雑、といった感じか。

「……来たか」

猛者は装備したゴリラアームＤＸを軽く触りながら入り口に目を向ける。今月のローンの支払いが未だだが今回の報酬で払えるだろう。何せカドモス以外にも貴重で上質な素材を使ったゴリラアームＤＸは力のアビリティ上昇だけでなく力の数値の上昇補正効果も付いているのがランクアップして上昇したステイタスでの魔法による鑑定で発覚した。……まさか俺でも把握しきれない効果があるとは驚きだな。……料金をもっと高く設定するべきだった。深層のドロップアイテムをあと一億ヴァリス分とか……。

「驚いたな。まさか君が来るとは……」

聞き慣れた声の方を向けば勇者に九魔姫に剣姫、そして千の妖精とロキ・ファミリア一行の姿。チームワークに難がある凶狼は当然として、大切断や怒蛇が居ないのは大勢だと目立つからか。そして後からはアスフィと……見知らぬ黒髪のエルフ。俺の血筋を知ってか良い印象を向けていない様子だが見覚えがない相手だ。

……そして店の隅にいた見知った鎧姿に猛者達の視線が集まった。

「よっ！　オイラはリドってんだ宜しくな」
「……フール」
　片方は陽気な声で、もう片方は籠もった声で名乗るが顔は見せない。詮索無用とギルドから前々から通達されているので訳ありと判断したのか詮索する気は無いらしいが気にはしている様子だ。
　……さて、どうやらこれで全員の様だし向かうとしよう。矢張り猛者が居るというのは心強いな。

（フレイヤ様も相変わらずの様だ……）
　敬服すべき女神の意志ならば今回の任務に参加することに異論はない。だが、その理由が例の少年の試練の邪魔になるかも知れないのと……ヴァルツ・クロッゾが落ち着いて恋愛をするのを眺めていたいから、と言われれば少しは思う所もある。顔にも口にも出さないが見抜かれて居るだろうな……。
「オッタル。一番強いのは君だけど指揮はどうする？　派閥の対立は今は忘れて一本化するべきだと思うけど」
「異論はない。ああ、それと俺は指揮官には向いていないからお前に任せるぞ、勇者」

「そうかい？　じゃあ引き受けるよ」

俺も勇者も同等のファミリアの団長であり、この様な形とはいえ指揮下に入るのは良いとは言えぬだろうが、フレイヤ・ファミリアは自分が最も女神の寵愛を得るのだという意志の下で行動しているので共に行動することはあってもロキ・ファミリアの様なチームワークでの戦いには向かない。此度はフレイヤ様の意志で参加した以上は最善を尽くすのみだ。

俺の返答に予想していたのかさほど驚いた様子も見せず勇者は頷き出発を告げる。今回、ヴァルツ・クロッゾは魔法による情報集めを担当し第一級冒険者が例の女や居るかも知れない同格の仲間との戦闘を引き受けるが残った第二級以下はモンスターとの戦闘やサポーターを引き受ける。万能者は何やらとっておきの切り札が完成したと言っていたが……。

「……最初に言っておこう。私に何かあれば見捨てて結構だ。今回も無理に参加した訳だしな」

デュオニソス・ファミリア団長のフィルヴィス、二つ名は知らないが忌み名として『死妖精（バンシー）』と呼ばれているエルフの女。今まで何度もパーティーが壊滅に陥り続けたと聞くが、それ故か群れるのを避けている様子。今回は主神が殺された団員の為にとロキ

に無理を言って参加させたのだろうが……。
「成る程。このメンバーならば壊滅の危険は低いから不幸など呼びはしないと思える為に派遣したのか」
「……本人には聞こえぬようにな」
道中、ふと気付いた事を口にするヴァルツを窘める。何で俺がとも思わんでもないが……本人には聞こえていないらしいが、少し距離を取っているのが気掛かりだ。秘密の任務故に死亡者が出ても公にはならぬがフレイヤが率いるファミリアの団長としてパーティーから脱落者が出るのは避けたい。
だが、相手は許した相手にのみ接触を許す者が居るほどに潔癖なエルフ。此処は王族に頼むことにして一言告げようとした時、先頭を歩いていた勇者が立ち止まる。
「これは凄いな……」
崖の下を見下ろせば数百を余裕で越えるモンスターの群れ。それが通路に犇めいて一方向を目指している。さて、どうするか……。
「俺が行くか？　あの程度なら無傷で済む。魔法は温存すべきだろう？」
「……そうだね。じゃあ……」
「フィン、私に行かせて」
今回の騒動は食糧庫に端を発しているとギルドの使者から聞いている。ならばモン

スター達がやって来た方向に向かえば何かあるのだろうが調査中に背後から来られても鬱陶しい。それにフレイヤ様の御側にいることが多い俺は体を動かす機会が少ないので勘を鈍らせないようにしたいが、剣姫もランクアップした肉体に馴れておきたいのか単騎での突撃を申し出る。

「……構わん。譲ろう」

此処で取り合っても時間の無駄だと譲れば自慢の風も使わずに剣姫が群れの中に飛び降りてモンスターを蹴散らしていく。少し譲った事を後悔すると思ったが、何時か敵対する可能性を考えれば戦闘を見る良い機会だっただろう。……その際、大きく関わりそうな男に視線を向けた。

「どうかしたか、猛者？」

俺を含め殆どの相手を二つ名でしか呼ばないこの男は客同士の争いに極力関わらないというスタンスを持っているらしい。つまり俺とロキ・ファミリアが抗争になったとして、ロキ・ファミリアと親しくしていても此方に魔剣や武具防具を用意するという事だ。……恋人が居るが、その時にどうする予定なのだろうか？

「……連れ去るかも知れんな」

この男ならするだろうと、そう思った。

俺がそんな益体もない事を考えた少し後、ヴァルツは他二名と共に俺と分断される事になった……。

お気に入り千突破記念　春姫との結婚生活

まだかな、まだかな、そう心待ちにしながら春姫は手鏡でもう一度、今の自分を確認する。化粧は濃すぎず、かと言って素っ気なくもなく、アクセサリーも派手ではなくてあくまで自分を飾りたてている範疇。服だって少し胸元を開けているが色気を強調した物ではない。

欲情して欲しいとも思ったが、それはこの後にどうとでもなる……少なくとも本人は思っていた。実際はどうでも、春姫の中では誘惑の自信はある。しつこい様だが本人の中では。

「あっ……」

門の前に立って雑踏を眺めていた時、通行人の中に目当ての人物を見つけ思わず顔がほころぶ。ダンジョンに向かう為に防具に着替えた冒険者や朝の市に向かう市民に混じって少し薄汚れた作業着に身を包んだヴァルツが春姫の方にと向かって来ていた。

「お、お帰りなさいま……ひゃっ!?」

思わず駆け出しそうになるのをグッと堪え、余裕を持って歩み寄るも足下不注意で躓いて転けそうになった春姫であったが、ヴァルツが抱き止めて助ける。腕の中の彼女は

恥ずかしそうにしながらも幸福そうな笑顔で見上げてきていた。
「お帰りなさいませ、旦那様」
「今帰ったぞ、春姫」
　そう言いながらヴァルツは春姫の額に口付けをする。嬉しい反面、どうせなら唇が良かったと思う春姫であった。尚、当然のごとく二人が居るのは外である。職種は違えど通行人が沢山居た。

「……むっ。どうも汗臭いな。すまない、こんな状態で抱き締めてしまった」
「春姫は構いません。……旦那様の全てを愛していますから」
　此処は二人の家、ロキ・ファミリアのホームのすぐ近くに建てられた新居。そう、春姫とヴァルツは結婚したのだ。恋人になるのに時間がかかった二人だが結婚は割とアッサリと話が進み、詳しく言うなら春姫が酔った勢いで申し込んだのだ。互いに派閥が違うのでどちらかのホームに住むのも憚られ、こうして家に住んでいる。此処から春姫はホームに、ヴァルツは工房に向かって丁度帰って来た所だ。
「流石に今日は俺が洗うぞ？　夫婦だから分担しよう」

「いーえ、旦那様はお仕事帰りなのですからゆっくりして下さい。今度手伝って下されば結構ですので」

ヴァルツから汗臭い作業着を受け取った春姫は有無を言わさずに選択場まで持って行くとヴァルツが見ていないのを確かめ、そっと抱きしめながら鼻を近付ける。スンスンと数度臭いを嗅ぐと誤魔化すように咳払いをして洗濯籠に放り込んだ。

「……幸せとはこんな時間の事なのでしょうね」

多分徹夜で作業していたのだから朝ご飯を早く用意しなくては、と、考えながら春姫は結婚を申し込んだ時の事を思い出していた……。

（……きっとはしたない女だと思うのでしょうね）

この日、互いが忙しく久々に会ったヴァルツとの食事の最中に春姫はそんな事を考えていた。色々と立て込む少し前、遂に肉体関係を持つに到った二人。夢かと疑いつつも濃密な体験の記憶は濃く、思い出せば鼓動が高鳴る。今もヴァルツの顔を見ればその時の事が脳裏に浮かび上がった。

二人が居るのはヴァルツの家で他に誰も居ないと思うだけで体が火照るのを感じる

のだ。関係を結んでから会えない日々が数日続いたが思い起こしては自らを慰めていた。鎖骨を見ただけで気絶するからと自ら目隠しをしてヴァルツに主導権を渡し純潔を捧げ、数度果てた後は何時の間にか目隠しを自ら外して激しく求めていたのは赤面しかなく、その後も鎖骨を見たら気絶するのは変わらない。

この日も何かあればと期待して懐に目隠しの布を忍ばせてはいるが流石に抱いて欲しいとは言い出せない。抱きたいと言って欲しいと願いながら鼓動の高鳴りを感じ酒で誤魔化す。でなくば顔の紅潮で悟られそうであった。

（お情けを……いえ、ベッドに行きませんか……無理、私をヴァルツ様の好きに……恥ずかしい）

春姫は冒険者であり、命の危険を感じる仕事故に生殖本能が働くのは仕方ない。純情でも根っこがスケベで夢で関係を持ったのを現実と思うのが彼女だ。どうにか上手い誘い文句を考えるも向いていないし酒が進んで余計に頭が働かない。

だが、此処で自分でも言えそうな言葉が閃いた。自分をヴァルツの物にして欲しいと、何とか言えそうだと春姫は思った。

「あ、あの！　春姫を貰って下さいませ！」

「……まさかお前から求婚を受けるとはな。待たしていたなら悪かった。明日にでも指輪を買いに行こう。……それとも俺が作るか？」

「え、ええ、お願いいたします……」

春姫だって結婚は考えていた。以前から結婚した場合はクロッゾの名を捨ててサンジョウノの名を名乗りたいと言われていた。だが、流石にこれはない、出来ればもう少しロマンチックなムードでヴァルツから申し込んで欲しかったなぁ、と思いながらも結婚を幸せに感じている春姫。

ただ、絶対に将来子供が出来てもこの失敗を口にすまいと心に誓うのであった……。

「お、お背中を御流し致します……」

眠る前に汗を流すためにと風呂の用意はされており、ヴァルツが入ったのを見計らった春姫は湯浴み着に着替えて手探りで浴室に入っていく。何故手探りかと言えば目隠しをしているからだ。最初は見当違いの場所にお湯をかけたりしたが諦めずに繰り返

して慣れたのか今では目隠ししたままヴァルツの背中を洗える。

「ひゃうっ!?」

但し慣れたのは背中を洗うことだけで、目隠しして浴室の床を歩けば当然のように滑る。重りが前についているからか前のめりに倒れそうになり、予め待ちかまえていたヴァルツに抱き止められて難を逃れるが、今度はヴァルツが手を離そうとしなかった。

「……春姫、構わないか？　俺は今すぐお前が欲しい」

「ふぇっ!?　は、はい！　私もずっと旦那様が欲しかったでしゅっ!?」

思わず噛んでしまった春姫は湯浴み着が脱がされていくのを目隠しした状態で感じていた。

（念のために念入りに体を清めておいて助かりました……）

経験から暫くの間は喋れば羞恥心が限界に達すると分かっているのでなすがままに身を任せ、待ちわびた瞬間を心待ちにしていた。

……その後、暫く経って。

「……少し休ませてくれ」

「ふふふ。春姫は大丈夫ですのでお気遣い無く欲望の果てるままに貪り下さいませ。次は趣向を変えて何か服を着ますか？　ロキ様から色々とお聞きしまして……」

「いや、先程から貪り食われているのは俺なのだが……」

少し窶れた様子のヴァルツは自分に跨がる春姫を抱き寄せて軽く口付けをする。仕事明けの体にこれ以上はキツかった。仕事明けでなくとも最終的にはこの様な感じになるのだが。Ｌｖ．は自分がずっと上なのに何故だろうと思いつつ眠りについた彼の顔を覗き込みながら春姫は微笑んでいた。

「では私も少し眠らせて頂きますが……起きたら続きをお願いいたしますね、旦那様」

ヴァルツの腕枕で眠りにつく春姫。ヴァルツが先に起きないと大変な目に合うのだが彼がどうなったかは語らずにおこう。余所の夫婦関係に介入しすぎるのも野暮だろうから……。